まえがき

おことわりパンフvol.3をお届けします。

韓国でのピョンチャン冬季五輪（オリンピック2／9～2／25、パラリンピック3／9～3／18）が終わり、２０２０東京五輪まで2年4ヶ月を切りました。オリンピックがさまざまな分野にもたらしている状況を「災害」ととらえ、さまざまな運動をネットワークでつなぐことを目的として立ち上げた２０２０「オリンピック災害」おことわり連絡会（略称・オリンピックおことわリンク）ですが、1年数ヶ月の活動の中で問題意識をより深め、「オリンピック災害」をさらに確信しています。

ピョンチャンでの冬季五輪では、２／８～11、反五輪の会&おことわリンクのメンバーでピョンチャン五輪国際連帯ツアーを行ってきました。昨年私たちが開催した「ＩＯＣ（国際おことわりコンベンション）」に参加して、ピョンチャン五輪の問題を報告してくれたスポーツ平和研究所のイ・ギョンリョルさん（パンフvol.1参照）が全行程をコーディネート、ソウルでの街宣やシンポジウム、カンヌン・ピョンチャンの五輪会場でのデモ・集会、開会式・会場前での抗議のパフォーマンス、市民メディアのインタビューや五輪に反対する人々との交流等々、熱くて（超寒かったけれど）濃密な4日間を過ごすことができました。

さて、パンフvol.3は、連続講座の3回目として、昨年7月に開催された「パラリンピックは障害者差別を助長する」と題した講座の記録です。東京五輪の中では、「オリ・パラ」という形で組織委員会を一体化し準備を進めています。講座では、道徳が教科化される状況のなかで、ボランティアや障害者理解と言った名目で行われる学校現場のオリパラ教育強制の実態、戦傷者のリハビリとして始まったパラリンピックの成り立ちと障害の程度で細分化されたパラリンピックの選手基準など、感動や美談として語られる選手の活躍の影に、健常者と障害者、障害者同士が分断される実態が語られました。オリンピックよりさらに巧妙に人々を動員する要素もパラリンピックには満載です。講座の中では、道徳の教科書を使ってのワークショップも行われ、パラリンピックの問題を考える契機になったと思います。今後も引き続き考えていきます。

3月31日には「3・11と東京五輪」をテーマに、小出裕章さん、佐藤和良さんを講師にお呼びした集会を持ち、第1期連続講座の締めくくりになりました。引き続き第2期の講座も予定していますし、講座以外の運動も取り組んでいきたいと思います。リオで生まれた「アンチトーチ」がピョンチャンでも登場しました。そのトーチを東京にもしっかりと受け継ぎながら、反オリンピックの国際連帯運動を展開していきます。おことわリンクの活動にどうぞご参加ください。

オリンピック災害おことわリンク連続講座（第1期）第3回

パラリンピックは障害者差別を助長する

司会（きょうごくのりこ）：みなさん、こんにちは。暑いなか来てくださってありがとうございます。今日、司会をします「おことわリンク」のきょうごくといいます。私たちは「オリンピック災害おことわり連絡会」を2017年1月に立ちあげ、2020年の東京五輪をいまからでも止めさせたい、という気持ちで運動をしています。オリンピック・パラリンピックの問題にはいろんな視点があると思いますが、この連続講座では、大きな問題をみなさんといっしょに考えながら、講座自体が運動につながるようなことができればいいなと思っています。

今日は連続講座第3回ですが、パラリンピックに焦点を当てて考えてみようと企画しました。今回の東京五輪では、オリンピック、パラリンピックの組織委員会を一つにして「オリ・パラ」としてやりはじめています。現在、文科省のなかにスポーツ庁ができていますが、パラリンピックは、かつては厚生労働省が管轄していたのを、いまは福祉からスポーツへという移行がなされ、文科省のなかで一体的に扱われている。一体的というならばいっしょにやればいいと思うのですが、歴然と分かれており、パラリンピック自体でも、障害を持つ人たちが非常に巧妙に分けられている。ちょうど去年の今ごろ、「相模原事件」が起きて、私たちはとても衝撃を受けましたが、あの事件の根拠となった優生思想が私たちの社会に蔓延しているということを、みなさん改めて感じたのではないでしょうか。そういうことをふくめて何が問題なのかということを、今日の報告者お2人の話を聞きながらいっしょに考え、次の運動につなげていきたいと思います。

最初に、学校現場では「オリパラ教育」という形で強制が始まっていますが、どういう形でなされているのかを現場の方からうかがおうということで、都立の特別支援学校で働いている増田らなさんに、学校現場のオリパラ教育について報告してもらいます。

増田らな（障害児学校労働者）

みなさんこんにちは。障害児学校労働者の増田と申します。「オリパラ教育なんじゃらほい」というテーマで報告させていただきます。

まずはじめに、私がオリパラに反対している根本的な理由は、スポーツは優生思想を本質的にはらんでいるということです。趣味で楽しむぶんには結構なことだと思いますが、税金を使うような性質のものではない。私は自分が汗水たらして払った税金をスポーツ大会に費やされることには非常に強い違和感を感じていますし、反対しています。それから、私たちが取り組んでいるオリパラ反対の運動が、スポーツに深い関係をもつ人々とつながっていくのも大事なことなのかもしれないけれども、優先順位としては、スポーツが苦手だったり嫌いだったり関心がなかったりする人々、とりわけ子どもたちとつながっていきたいし、そういう人たちが嫌だと声をあげていける状況をつくっていくことが先だと思っています。

◉「世界ともだちプロジェクト」と「オリパラ給食」

昨年〔２０１６年〕から今年にかけて私の勤務校の職員室での流行語が「オリパラ」です。とくに今年度に入ってからは、同僚の口からさざなみのように、オリパラ、オリパラ、オリパラ、オリパラというふうに、ひんぱんに耳にするようになりました。みなさん、ここの会場に来られる途中、中学校の校門の正面に、四本のオリンピック関係の桃太郎旗がはためいていたのにお気づきになりましたでしょうか？

この今日の集会、なぜか一部のメディアでタイトルが「オリパラ教育」ではなく「オリパラ給食」となっていたところがあるらしいです（笑）。オリパラ給食はおいしい、ということでご紹介させていただきます。

うちの学校では「世界ともだちプロジェクト給食」と申しまして、昨年度はリオ五輪があってブラジルのメニューでしたが、今年は「世界ともだちプロジェクト」で、５カ国と重点的に交流せよ、というのが上からおりてきて、その５カ国を中心としたメニューを月１回ずつ食べるというふうになっています。去年はブラジルのフェージョーアーダという豆料理で、今年度は１９６８年のオリンピック開催国のメキシコの料理が出ました。フェージョアータにしても、メキシコのメキシカンピラフやフランというプリンみたいなデザートにしても、リオやメキシコはオリンピックに反対して激しい闘いを繰り広げた地域でもあるのですが、そういう人たちも日常的に食べている食事なんです。他の人の食文化をオリパラの文脈で吸い取るというのは食に対する冒とくだと思いますし、反対している人間もメシを食っているんだよと言いたい。

◉「あなただけの」オリパラ学習ノート

いま学校でオリパラ教育のいろんな教材が配布されている状況です。昨年の９月に「東京２０２０オリンピック・パラリンピック学習ノート」が小学校４年生以上の児童・生徒に配布されたのですが、これが現場でいちばん「活用」されています。２０２０年までの４年間使用するということで、ごていねいにビニールカバーまでついています。このノートをパッと開くとこんな文言があります。「このノートはみなさんがオリンピック・パラリンピックに関する学習や調べたことなどを書き残すノートです。開催までの４年間の思い出をつづり、あなただけのノートを作り上げてください」。２００２年に文科省が全国の小中学校に配布した道

徳の副教材「心のノート」をちょっと連想させるような作りです。

日本代表選手４人の代表選手メッセージのあとに「東京２０２０オリパラ大会までの目標」というページがあって、東京２０２０大会へのかかわり方を一人一人に記入させる欄が非常に大きく取られています。その下にはかかわり方のヒントとして、ボランティア活動、スポーツに親しむ、世界各国の人と触れ合う、障害のある人と助け合う、日本文化や東京都の良さを知る、ゴミのないきれいな東京……とかがあげられていて、何をやらせたいかが一目瞭然です。

別のページでは２０１９、18、17年の目標――２０２０年大会へのかかわり方を踏まえながらいまから取り組みたいこと――そこまで書かせるようになっています。そのかかわり方へのヒントとして、学校でオリンピックを調べる学習のあと、地域のスポーツイベントへの参加とかボランティア活動など、学校とはかかわりのない、学校外でやっていることまで記入するように勧められていて、もう子どもたちのすべてをオリパラにからめ取ろうということがありありとしております。

◉ノートはこんなふうに使う

私の学校は障害児学校ということで、職業学習というものをやっているのですが、去年、障害が比較的軽いグループの生徒がその授業のなかで、このオリパラノートにビニールカバーをかけるという仕事をさせられていました。

それから、一年生の校外学習に、「施設の見学や体験活動を通してオリパラについて知る」という項目が挙げられています。アクティブラーニングキャンプという非常に充実したオリパラ展示のあるパナソニックセンター（パナソニックはオリンピックのスポンサーですね）が見学場所に入っていて、そこのオリパラ・コーナーで表彰台にのぼって月桂樹の冠をかぶりメダルをつけてみんなで記念写真を撮って、その写真を思い出の残るノートに貼るという段取りになっていました。

昨年来、教務主任が何回かこのノートについて言及していました。上から強く指示されているようで、これを活用しろと繰り返し言います。昨年、うちの部活動の器楽部が、地域の老人会の催しに参加して演奏を行うとき、会議や朝の打ち合わせなどで「当日、器楽部員にノートを必ず持たせてください」としつこく念押しされて、「ええい、ちくしょー」と思いながら、器楽部の生徒に持たせたんです。そのとき、「このノート、なんだと思う?」と彼女に聞いたら、「オリンピック」と答えるので、「これから地域の老人会で楽器をやるんだよね。これってオリンピックと関係あること?」と聞いたら、その生徒は「ない」と即答しました。子どものほうがよくわかっていますね。

◉オリパラ授業・実践篇

それから「オリンピック・パラリンピック学習読本」が昨年度のはじめに配布されて、これはクラスや学習グループによって使っているところと使っていないところがあるようです。どうやって授業をやっているのか、ちょっと気がかりな部分があります。それから英語の補助教材で「Wellcome to TOKYO」というのがあって、これも小学生用、中学生用、高校生用がそれぞれあり

ます。その内容は、東京の名称とか日本の伝統文化や先端技術などを英語で来日外国人に案内し、クールジャパンを宣伝させるためのようなものです。

昨年、水道橋にある東京都教職員研修センター（ここは都立学校や東京都の公立学校の教員が研修する場所です）で、小学校での実践紹介がありました。自分の考えを明確に文章表現することを狙った授業で、東京五輪のために取り組みたい課題を子どもたちに考えさせるという、非常にあざとい授業です。

子どもの作文が紹介されていたのですが、外国人観光客が困らないように英語の表示を増やすとよいのでは、という意見を子どもが書いていた。別にオリンピックとは関係なく日常的に外国人はいるので、彼らに対して住みやすいように配慮するのはあたりまえで、これをオリパラにからめ取るというのは本当におかしなことだと思います。器楽部の老人会との交流もそうですけど、子どもの活動とか意見をすべてオリンピックに収れんさせて都合よく利用していくのは、非常に怖いなと私は感じています。

現在、オリパラ教育でなされている主な授業は、ボッチャという障害者の競技。それとブラインドサッカーという身体障害者のスポーツを体験したり。一部の学習グループでは、五輪競技の調べ学習――どんな競技があってどんなルールでどんな道具を使って行うのか、東京２０２０では日本選手はどんなふうに活躍するのか。全校集会では生徒会がオリパラ・クイズ大会を主催しました。○×クイズや三択で、たとえば「東京ではオリンピックは何回開催されたでしょうか?」という感じです。

また生徒玄関の近くにオリパラ・コーナーが設置されました。「世界ともだちプロジェクト」の対象国のアフリカの国の、アフリカン・ランプアイというメダカみたいな小さな魚と、日本の金魚の水槽が並んでいる。その魚の世話を子どもにさせてオリパラにつなげるのが狙いのようです。余談になりますが、いま校内のあちこちに七夕の笹があって、短冊をいくつか見たんですが、オリパラのことを書いている子どもは、私が見たかぎりは一人もいなかったです。

◉フラッグツアー、カウントダウン当番、オリパラ川柳

３月に、東京オリンピック・パラリンピック・フラッグツアーという、オリンピックの旗とパラリンピックの旗が都内を回るイベントがありました。本物は都庁に飾ってあって、回っているのはレプリカらしいです。でもレプリカとは書いていないので、すごい人数が集まりました。私も気になって見にいってみました。座席が８００あって、うち６００が動員でした。ほとんどが地域のスポーツ団体の人たちで、あと地域の小学生。小学生は希望者、中学校はボランティア部とか生徒会関係の子どもたちが動員されていて、私の勤務校からも生徒会の子どもたちが動員され、顧問の教員が付き添っていました。

うちの学校では、子どもたちが制作した「世界ともだちプロジェクト」の対象国の国旗が一年生の教室の一角に飾られています。またたぶんどこの学校でも目立つところに、東京オリンピックまであと何日という表みたいなものが出ていると思うのですが、オリパラ・カウントダウン当番というのがあって、生徒会の生徒が順番で日にちを変える作業をやらされています。

渋谷区公認オリパラ推進教育で、日本代表選手へ世界で一つだ

けの笑顔のメダル・表彰状をつくって贈ろうというイベントがあって、区立の小学校の児童たちが手作りの丸い紙に色紙やシールをはって、たとえば「浅田真央さん、いつも美しい演技をして、私たちの気持ちを奮い立たせてくれてありがとう」とかいう表彰状をつくって贈ろうという取り組みが、インターネットで紹介されていました。風呂敷の使い方を日本の伝統文化の一貫として学習して、日本人としての自覚を学ぶ小学校もあるようです。

教育雑誌でもオリパラ特集が組まれていたりします。ぎょっとしたのがリオ五輪のときの聾学校の生徒の川柳作品で、「リオ五輪　マリオでつなぐ東京へ」「ニッポンの底力をなめるなよ」。これ、子どもの作品です。

◉反対意見を言うと校長から恫喝

私の前任校の校長がオリンピック教育に積極的だったのですが、人事考課の面接でオリンピックに反対する意見を出したところ、あなたは東京都から給料をもらっている身分なんだから、東京都の方針に反対するようなことはとんでもないと校長に言われました。全校の職員が集まる会議でも、オリオパラ教育推進に反対する意見を述べたんですが、そのあと教室に一人でいるところへ校長がいきなり乗り込んできて、あなたの発言の真意を聞きたいと迫ってきたので、非常に怖かったです。

いまの学校では、去年はそれなりに平穏無事だったのですが、このシャツ（表にOKOTOWARI！　裏にTOKYO2020）を着て出勤したところ、校長に呼ばれて、このようなシャツを着て子どもたちの前に立たれると生徒が混乱するので困る、とかいう、わけのわからない理由で脅されました。私は、都民や保護者のなかにもオリンピックに反対したり疑問を持ったりしている人は少なくないと反論しましたけれども、校長はそういう保護者には学校の方針を理解してもらうと答えました。つまりオリパラに反対する都民は説得の対象にすぎないということらしいです。

私は国語と数学の授業を担当しているのですが、「賛成ありきの授業もおかしくないですか？　ピョンチャンや札幌など、環境破壊の問題もずいぶんあるじゃないですか」と言ったところ、校長は、オリパラに疑念をもたせるような授業をしたら、あなたを授業から外して他の先生に代わってもらうと恫喝をかけてきたので、怖くて怖くてしょうがないです。いまのところ当たり障りのない教材で当たり障りのない授業をやっています。

同僚は、上からいわれるがままにオリパラ教育のノルマをこなし、五輪のエンブレムのすごく大きなポスターを張っている先生もいます。夏休みには校内研修会があって、各学年からオリパラ教育の取り組みが発表される予定です。子どもたちはいろんな意見を聞いて、いろんな角度から事実を知って、迷ったり悩んだりしながら自分の考えを築いていくのが当たり前なのに、その当たり前のことができない状況だと感じています。オリパラ教育は、根っこから学びを破壊するものだといわざるをえないです。ご清聴ありがとうございました。

司会：ありがとうございます。東京都の学校のすさまじい状況でした。東京では昨年からオリパラ教育が全校に予算がついて始まっているわけですけれども、おそらく東京だけではなく、全国の学校でオリパラ教育の強制がますますひどくなっていくでしょ

う。最後に増田さん自身の大変な状況が話されましたが、特別支援学校は教職員の数が多く、その全体の会議で手を挙げて発言するのはとても勇気のいることで、そのなかで管理職から恫喝がかかっているというのは大変だと思います。私たちも応援して励ましていきたいです。がんばってください。どうもありがとうございました。

では引き続き、北村小夜さんのお話をうかがいます。北村さんは元教員で、特殊学級（当時）の担任として、子どもたちを分けない教育をずっとやってこられました。私は神奈川で「日の丸・君が代強制反対」の運動をやっていて、いまの状況を憂えて年に一度ぐらいは小夜さんのお話をお聞きする機会を作っています。私たちの知らないことをたくさん知っていて、かつてといまがどう重なっていてどこが違うのかをていねいに話してくださいます。今日の講座のタイトルは「パラリンピックは障害者差別を助長する」とつけたのですが、小夜さんから「ダサい題だね」と言われてしまいました。ごめんなさい。タイトルのダサさは内容でカバーしてもらえるかな、と思います。ではよろしくお願いします。

北村小夜（元教員）

北村です。年をとっているものですから、皆さんがご存知ないことを私が知っているだろうと思われて、このところしゃべる機会が多いのです。たしかに生まれたのは一九二五年、治安維持法が公布された年で、それから皇民教育を受けて軍国少女に育ったわけです。考えてみると、同じようなことが起こっているなと思います。

いま増田さんは、ごく自然に分けられた学校での話をされましたが、私は子供を分けないというところから始めないと何も解決しないと思っています。いままでいろんなことをしてきましたが、これまでの肩書きはだいたいお返ししました。一つ残っているのは「障害児を普通学校へ・全国連絡会」という組織。これだけはまだ完全には役目を果たしていないと思いますので続けています。どの子も地域の学校で学ぶことができないのは、学校の教育の中身のせいでもありますけれど、障害者差別が厳然としてある。障害児が普通学校には行きにくいからああいう学校に行って、ああいう学校はどんどん増えて、特別支援学校の教室が足りないなどとさかんに言われていますが、足りないのは学校ではなくて、普通学校の包容力がないから、地域の包容力がないからなのです。そのことの延長線上でパラリンピックも考えてみたいと思っています。

◉道徳の教科書とオリパラ

本当をいうとスポーツのことは何にも知りません。興味もまったくありません。何で速く走ったり高く跳んだりしなければならないのか、まったくわかりません。私に必要なのは、逃げ足だけなんです。それだけは確保しておきたい。いま行われているスポーツに対して、いくらでも文句をいうことはあるんですけれど、そういうことよりも、かかわりたくないと思っている状況です。

今日、私が用意した資料は、一つは私が『ピープルズ・プラン』に書きました「クローズアップされるパラリンピック」（北村資料A）。障害者とパラリンピックがクローズアップされることによって、いっそう障害者差別が進んでいるのではないかということです。それと東京都の人権センターの資料（北村資料B）。東京都はオリンピック・パラリンピックをすることで人権意識が高揚すると思っているようで、たくさん資料を出していますが、その一つです。

もう一つは、これこそ今日お伝えしたいと思ったものです。来年度から、まずは小学校から道徳が教科化されます。その八種類ある教科書のなかで一つだけ持って来たのは、日本文教出版の道徳の教科書です（北村資料C）。この教科書にはノートが付いています。ノートと教科書が一体になったものもありますが、これは別冊になっています。そのなかの「スポーツの力」というパラリンピックを題材にした文章と、「東京オリンピック　国旗にこめられた思い」という文章。二つの題材を資料として付けました。同時にノートのその部分を用意しておきました。子どもはこの教科書を読んで、このようなノートに書かなければいけない。今日はみなさんにこれを書いていただこうと思っています。子どもになったつもりで。（会場笑）

いや、来年から子どもたちはこんな目に遭うんですよ。この教科書を読まされて、話を聞かされて、このノートに書かなければいけない。で、これはどう書いたっていいんですけれども、教師は評価の資料にします。そのことを考えて、ぜひ書いていただきたいと思います。小学校六年生になったつもりで書いてください。たぶん書きたくないし、書くならばこう書きたいというご自分の意思があると思いますが、それは別にアンケート用紙を用意しておきましたので、そこに書いてください。今日書いていただいたものは、これからの道徳教育に対してどう闘っていくかについて、とても役立つ資料になるだろうと思います。

◉使われる選手たち

すごくいまパラリンピックが注目されていますよね。オリンピック以上に。たぶんどこから見ても、とても使いやすいものなのだろうと思います。国威高揚については、たしかにパラリンピックにいった選手たちは日の丸を揚げてくれますし、君が代を歌ってくれます。日本を有名にしてくれます。企業もいま非常に熱心です。どんどん応援する企業が増えています。たぶん役に立つだろうし、経済効果が期待できるからだろうと思います。ボランティアもすごく増えています。制度のうえでも整ってきました。ついこのあいだまでは、パラリンピックの報道は社会面でした。このごろではスポーツ欄に登場するようになってきました。それはたしかに、いままで厚労省の領分であったものが文科省のスポーツ庁が管理することになったことにもよるものだと思います。

そういうことを挙げると、障害者の権利がずいぶん良くなってきたように言われていますけれども、どうなんでしょうか。実際に障害者の権利条約も批准されましたし、障害者差別解消法も成立しました。だんだん良くなるはずなんですけども……。おそらく差別があるから差別解消法が必要なわけで、やっぱり差別があるんだと思います。

◉なくならない差別

私が育った80年から90年くらい前の話ですが、障害者は「ごくつぶし」といわれていました。戦争に行けないのは「非国民」ですし、食糧の配分だってちゃんと差別されていました。そのことをだれも不思議に思わなかった。気の毒に思う人はいたと思いますが。家族が養うのはとても大変だったはずですけど、「やっぱり働けない人がもらえないのは当たり前のことだ」とみんなが思っていたのだと思います。

そのことがいまなくなっているかというと、決してなくなっていないのだろうと思います。障害をもっている子どもが障害者の学校に行けていいな、という面もありますが、「あそこに行かなければならない子どもだ」という差別はちゃんとあります。

そういう差別のなかでパラリンピックの選手だけが輝かしい光を浴びているわけですが、それは本物でしょうか。たぶん本物ではないと思うのです。誰だって障害者に対してあわれみの心、あるいはちょっと後ろめたい思いを持っている。そういうものを、パラリンピックはちゃんとくすぐってくれるのです。だから、献金もするし、ボランティアもするし、応援もするみたいなことが起こってくる。

障害者なのによくがんばっているなぁ、といういい方も相変わらずされています。がんばれない障害者に、あるいは重度の障害者に向かって、「障害者もあんなにがんばってますよ」と。

これは古い話ですが、大江健三郎さんの息子の光さんが作曲家としてテレビに出たとき、私のマンションの隣の部屋に住んでいる、障害児をもっているお母さんに対して、「いまテレビ見てごらんなさい。障害児でもがんばるとああなるんですよ。ああいう学校を選ばないと」と言った人がいた。そんなことはわかっているんです。しかしその子はピアノが弾けるようにもならないし、作曲することにもならない。ならないけど、ちゃんと生きているんですよね、地域の普通の学校で。

◉パラリンピックは戦争から始まった

そういうなかでパラリンピックをどう考えていくのか。パラリンピックの歴史は戦争から始まったんです。私はこれにこだわっているので、何度も言ってきたことですが、資料の「クローズアップされるパラリンピック」の3ページめに、ていねいに書いておきました。

ナチスドイツがポーランド侵略を開始して、第二世界大戦がはじまります。１９４２年にはパリもドイツに占領される。連合軍がノルマンディー上陸作戦を考えたときに、この作戦では必ず障害者、それも脊髄損傷者がたくさん出るにちがいない、そのための病院を用意しなければならない、と。このへんはちょっと日本よりましかなという気がしないでもない。障害者が出ることがわかっていて、対策を講じていた。そこで用意された病院で、それなりの治療をしていくわけですが、なかなかうまくいかないなかで、院長のグットマンが考えたことが、スポーツだった。スポーツのなかでも競争することだったわけです。

競争することによってリハビリの効果が高くなる。わかりますよね。ただリハビリだけの目標でがんばって同じことを何度も

やっているときと、アーチェリーで姿勢を正して「ああ、いい姿勢だな」と言われるときとではちがう。脊髄損傷の患者にたちにとってスポーツはたいへん有効な手段だった。そのなかで確実にスポーツが役に立つ、特にスポーツで競争することに意味があるということで、さかんに行われるようになるわけです。

◉消えた20パーセント

このときの資料が残されていまして、かなりの人たちが職場復帰をしている。脊髄損傷として病院に送られた人のうち80パーセントが何らかの形で職場復帰をしたというのです。私はその80パーセントという数字にはちょっと疑いをもっていますが、かなりの人たちが復帰していく。受け入れる職場もあったでしょうし、脊髄損傷という限られた症状が対象ですから、リハビリの効果も大きかったと思うんです。

でもどう探しても、残りの2割の人の資料はまったく見つかりません。本当に障害者に対する対策を講じるというのだったら、いちばんしんどい人たちのことがわからなければいけないと思うのですが、その20パーセントがどうなったかについては、まったく触れていない。触れていないということは、スポーツにたいへん効果があったといわれるけれども、そこには必ず20パーセントの落ちこぼれがいたわけです。たぶん復帰した人たち、障害を抱えながら車いすに乗って職場に来た人たちは歓迎されたでしょうけれども、歓迎されないでそこに残った人、言ってみれば相模原の施設に行くしかないような人たちが、そこにはたくさん出てきたのです。資料はそこにはまったく触れていない。

そこで効果があった80パーセントの人を対象にどんどん進んでいって、パラリンピックが成り立っていくわけです。いま考えると、どのスポーツをみても同じことが行われていますよね。そのなかのできる人がスポーツをやっている。相変わらず競争の続きをやっているということになると思うんです。

◉クラス分けという問題

パラリンピックでよく話題になるのはクラス分けです。パラリンピックは非常にメダルの数が多いんです。というのは部門がたくさんに分かれるから。手がどこまであるかで部門が違う。違うことで、種類をたくさん作れば作るほど、それぞれにメダルが必要になってくるわけで、金メダルの数はオリンピックよりもはるかに多い。おそらく倍ぐらいあるはずです。ですから手っ取り早く金メダルを取れるというものでもあるのです。その分離が非常に難しい。

もちろん競技ですので、オリンピックにある様々な問題と同様のことがほとんどパラリンピックにもあります。ドーピングもあれば何でもある。とくにひどいのがクラス分けの問題です。かつて水泳の成田さんがすごく怒ってテレビに出ていた。彼の障害の度合いが一つ軽くなったんです。障害が軽くなるのはよさそうに思うのですが、本人にしてみればすごい打撃です。いままでより障害の軽い人と闘わなければならない、これだと金メダルを取れないかもしれない。そういう相克が絶えずクラス分けには続いているのです。

シドニー・パラリンピックのときに、バスケットボールで、選

手12人のうち、後で調べたら10人が健常者だったということがありました。当然メダルは剥奪されたわけですけど、そういうことが起こりかねない。金メダルは、それをとることによって一生安楽に暮らせる国もあるので、金メダルを取りたいという願いはとても大きいと思うわけですが、それが徹底して追求されている。

◉競争と排除

階級分けがものすごく厳しくて、水泳では、面接をして、その次に水の中に入れてみて、その次にまた面接して、というふうなことが繰り返し行われるなかで、この人の障害はどのくらいだろうかと判定する。その判定をどう通過するのかが難しい問題で、すでに戦いはそこで始まっている。そういう意味でパラリンピックの戦いはオリンピック以上に厳しいものがあり、厳しいだけに期待も大きい。

それから、スポーツ専門に育ってきた人でない人たちも、たくさんかき集めなければならない。東京でもまだ養成の対象者を募集しています。よさそうな子はいないか、希望者は養成しますよと。福岡県や、各地でもやっていて、養成して送り出すまでをスポンサーをつけてやるみたいなことが行われています。選手探しにも、ものすごい競争がありますし、べつに日本財団だけではなくて、あらゆる企業が懸命になっている。うちは選手をもっているということが看板になる。それでコーラが売れたり売れなかったりするわけですから。

それから器械の問題もすごいですよね。実際に競技の場面になると、器械同士がガチャンガチャンと当たって争っています。器械の優劣もたいへんなもので、その競争も国を挙げてやっています。

そういう問題がたくさんあるなかで、それでもパラリンピックをやっていくということは、国として非常に役に立つからこれだけ進めているのだろうと思います。さっきもお話がありましたけど、東京都の力の入れようも大変なものです。

東京都の資料に升本直文さんが書かれた文章を読みますと、オリンピックはどう人権を克服してきたのかと書いてありますが、人権を「克服」したぶんだけ、差別をつくっていることになるのです。排除しているからこそそうなる。女がオリンピックに参加できることになったということは、女なら誰でも参加できるわけではなく、こんな女なら参加できるということです。こんどは障害者が参加できるようになったとき、こんな障害者なら参加できる、これは参加できないという。取り上げられるものがあれば排除されるものが必ずあるわけで、そのつど差別を重ねてきているわけです。その最終的なところが、いまのパラリンピックなのです。

◉書かされる子どもたち

今日は、私はこの道徳の教科書（北村資料C）をどうするかを考えたいと思っています。佐藤真海さんという人がどのようにしてパラリンピックに参加して、それをどう考えているのかをここに書いています。その文章を子どもがどう読むのか。みなさんが6年生の子どもになったつもりで、これを読まされた感想をノートに書いてください。

こんなことを子どもが書かされるというのは、やっぱりヘンですよね。「気持ちを考えていきましょう」とか。道徳の教科書はみんな、聞きっぱなしではなく自分がいっしょに考えるというのが向こうの作戦なんです。その作戦として、「友だちはどう考えたか」、「ここにある生き方について考えたことをまとめてみましょう」というようなことが示されている。これを子どもに書かせるということは、教師の評価の資料になる。教師は数値的な評価はしないが、文章で表現することになっています。それを表現するときに、評価ですから、よかったとか、わかったとか、ここは課題だとか、何かを書かなければならない。書く手がかりとして、必ずこれを資料にする。

資料にされることを承知のうえで、ぜひ書いてください。やっぱりいい点をもらえるように書かなきゃね（笑）。それを書くことによって、どういうことになるのかというのが、今後の道徳教育。パラリンピック教育に限らず、すべてのものが、こういうことで子どもにかかわってくるわけなんです。しかも道徳として。

第9課の「東京オリンピック国旗にこめられた思い」は国旗・国歌の問題です。道徳の教科書は、国旗・国歌を直接出さなくても、この問題にどんな形で取り組むかということを重視しています。これをどう思うかと書かせるのです。国旗・国歌については常に、これは違うんじゃないか、という意見は出ているのですけれども、それを幅広いところからみた感じで、子どもに考えさせようという作戦なんです。これはたちが悪い。たぶん私たちが日の丸を教わったのとはちょっと違う言い方をしています。日の丸の「丸」は何、とは言わないで、こういう形で国家をどう考えるかということになってしまっているんです。

子どもになったつもりで、そのノートに書いてみてください。これからの運動に役立つと思いますので、ぜひ協力してください。

司会：ありがとうございました。小夜さんから課題が出たので、これから時間を取って宿題をやってもらい、そのあと休み時間に入り、後半は討論にしたいと思います。みなさん、子どもはいつもどんな気持ちでやっているのか、いやだなぁと思っているのかを感じながら課題をやってください。

質疑応答・討論

司会：後半を始めます。質問はありますか。

●学校現場での攻撃と抵抗

質問：増田らなさんへの質問です。職員会議でオリンピック反対ですと言われましたね。そのとき他の教員は、あなたの発言をどうやって聞いているんですか。

増田：当時、職員連絡会に出席しなければならない職員の総数は百人以上いて、校長からオリパラ教育推進という寝言が出たので、私は「都民のなかにも反対する人はいるんですけど」と2、3回言ったのですが、完全にシカトされました。去年、転勤して、やっ

ぱり同じようなことがあって反対意見を言ったところ、定年間近の先生から、じつはぼくも反対しているんだ、という話があったていどです。今年は校長から圧力をかけられたので、公然と反対の意見は言いづらい状況です。

司会：学校のなかだけではなく、外も含めて、オリンピックに反対の人は、意外といると思うんです。でも校長が増田さんに言ったみたいに、学校ではやらなければいけないもの、という受け止め方があるなかでは、なかなか自分の意見として「反対」とは言いづらいし、反対を表明している人に対してその場で共感の意思表示をするのは難しいかもしれません。

北村：大雑把に言えば、支援学校のほうが、普通の学校より管理体制は緩やかだよね。そもそも教育課程もすごくあいまいだし。だからオリパラをやろうと思ったらやりやすい。

増田：たしかにそういう面があります。

北村：普通の学校だったら時間数も決まっているから、その時間以外には、やらない。いま学校の教員や子どもにかかっている攻撃はものすごくたくさんあって、オリパラはそのひとつでしかないわけです。国旗・国歌法からずっと続いているものがあるから、いまさらこんな形で抵抗しようなどというのは、珍しい話になっているんでしょうね。

増田：うちの学校は職員会議がなくなり、職員連絡会になっていて、校長が一方的に伝達事項を話して、質問や意見のある方は個別に校長室に来て言ってください、という。これは実際にはパワハラですね。もう何も言えない状況です。

会場：私には墨田区立の小学校４年生の子どもがいます。いま区立小学校でも、３年生の夏に、オリンピックにかかわる新聞記事を一つ持ってきて自分の感想をまとめなさい、という宿題が出ている。結局は親が協力しなければできない宿題ですから、親も含めてオリパラに協力させる体制を作られているようで、用心しています。そこで質問ですが、オリンピックに反対している先生の力になるためには、保護者としてどういうことをしたらいいのでしょうか。

増田：保護者の場合は、体育祭や文化祭など大きな行事のときとか、年１回の学校評価アンケートのときに、オリパラ教育をやってほしくないと、きちっと書いていただけるといいと思います。特に体育祭とか運動会は、オリパラ関係の取り組みが入りやすいんです。オリンピックをイメージしていろんな国のダンスをメドレーでやるとか、障害のある子どもがパラリンピックの旗をマントみたいに着てグラウンドを回るとか。そういう演技について、子どもを利用してオリンピックを推進するのは保護者としていかがなものかと思うと書いていただけると、たいへん励みになります。

会場：みんなには伝わらないのでは？

増田：たしかにみんなには伝わらないし、その担当者しか見ないと思うんですが、保護者の声というのは助かります。よろしくお願いします。

●障害者運動はどう言っているのか？

会場：北村さんにお聞きします。障害児とか障害者の運動体で、オリパラ問題は議論されているのかいないのか、あるいはどういう議論のされ方をしているのか、もしご存知だったらお聞かせください。

北村：相模原事件が起こったとき、増田さんに、あの事件は学校でどう扱われているの？と聞いたら、そのことにはまったく触れないでオリパラばっかりだよ、という返事だったんです。相模原事件みたいなことが近いところで起こったときに、子どもたちがどんなふうに反応するのか、教師たちがどう対応するのかは、すくなくとも障害児の教育に携わっているところでは重要な問題だろうと思ったのだけれど、学校ではまったく話題にされていない、オリパラばっかりだよと。

「障害児を普通学校へ・全国連絡会」の仲間の一人で、障害をもった教師がいるのですが、彼は卓球を趣味としてやっていて、なんとかしてパラリンピックに出たいと願っている。私は、やめた方がいいよ、とは言っていないのですけど。彼は数学の教師ですが、脳性まひで、体が不自由なんです。秋田の中学で、災害のように「いざ」というとき、あなたは役に立たないので学級担任はさせられない、といわれる。

ＤＰＩ（Disabled Peoples' International）では、きちんとした見解は出していないのですが、私が集会でパラリンピックについて質問したときに返ってきた答えは、私たちとしても疑問を持って、どちらかといえば反対ですけど、決まったものには反対できませんと。ものを言わない障害者の話は聞いていないからわからないのですが、ものの言える障害者、考えてものを言っていく障害者の人たちからは、決まったものですからその範囲のなかでしかできません、というような答えしか返ってきませんでした。

会場：「青い芝の会」はどうでしょうか。

北村：全障連（全国障害者解放運動連絡会議。「青い芝の会」も母体の一つになった）はいま全国的には機能していません。

会場：神奈川で障害児の高校入学を実現する会を30年近くやっています。神奈川は青い芝の会の横田弘さんが本当に原則的にやっていて、私も横田さんのあとを追いかけながらやってきた一人なのですが、横田さんが亡くなって、神奈川には実際は青い芝の活動がないような状態です。横田さんの主張を受け継ぐ人もいて、神奈川もいま当事者運動があるんですが、やまゆり園の事件や、それ以外の問題もあったりして、オリンピックは東京都の問題ということもあるのか、神奈川ではあまり話題にならないですね。

北村：今日の集会は、とくべつその方たちに案内を出していませんが、障害者のことを話すときに、「私に黙ってやるなよ」と、ここに現れる人が一人くらいいてもいいと思ったんですけど。障

害者の人たちはいつも、私たちに関することを勝手にきめないで、と言っているのだから。

●振り分ける段階から競争がある

会場：私は松戸から来ました。パラリンピックのゆがんだ性質から言って、記録がほしいために、わざわざけがをしたり、義足をしたりということもありうるのではないかと危惧を感じるのですが。

北村：パラリンピックで一番の問題は振り分けです。公平にするためには限りなく分けるしかない。同じ程度の人と競技しなければならないので。制度は何度も変えられているのですが、これなら、というのはなかなか見つからない。目がどのくらい見えるかにしても、検査したからといって、それが確実、適当かどうかはわからない。みんななるべく見えないようにしようとして検査を受けるわけですから。検査の段階で本人がちょっと嘘をついて、後から問題になることもたくさんある。

すでに分ける段階で競争がある。なるべく障害を重くすると、重い人とやるから勝つチャンスがある。それを器械がサポートするわけですよね。靴から着物からぜんぶ競技ごとにある。そういうものがいくつもあったうえで競う。競うことが必要なのかどうか。メダルを獲得するためであれば、どうしてもそれは必要ですが、スポーツを楽しむことを考えるときに、はたしてこういうことをしなければいけないのか、それをしなくてもいい楽しみ方がないのかを考える必要があると思います。

●知的障害者と五輪

会場：パラリンピックには、もともと知的障害者は入っていなかったはずですが、いまは卓球と水泳で入っている。それはいつごろからで、なぜそうなったのでしょうか。

北村：１８９６年のオリンピック第１回アテネ大会では女性は参加できませんでした。当時は女人禁制の古代オリンピックをモデルにしていましたから。女性が参加できるようになったのは１９００年パリ大会からです。64年に男性のような格好をした女性が入ったことで問題になり、メキシコ大会から女性だけの性別検査が始まりました。これは人権侵害ということで99年に廃止されます。

障害者も、参加できる種目をなるべく多く広くといいながら、事件が起こるとそこをまた制限したりする。それと、障害によっては非常に早くから自分たちのスポーツをやっている人たちがいる。視覚障害の人とか聴覚障害の人とか、それぞれの障害によって歴史をもっている部分があるのです。身体障害といったときに、すくなくとも体は自由に動かせる人と、体そのものに障害をもっている人たちが、どうやって入れるか。かなりややこしい問題です。

会場：知的障害のほうでは、スペシャル・オリンピックというのがあったんですよね。知的障害は、別枠で排除されていた。

増田：知的障害の競技が採用されたり、２０００年のシドニー五輪で健常者をどっと入れたチームが金メダルをとるという不祥事があって知的障害の部門がなくなったり。浮かんだり消えたりという状況のようです。１９９８年の長野のクロスカントリーで初めて知的障害者の競技が入った。

北村：長野を忘れるなというのが知的障害者の合言葉になっていますよね。

増田：２０１２年のロンドン五輪で、ずっと知的障害者に閉ざされてきた門戸が12年ぶりに開かれて、陸上、卓球、水泳に出られるようになる。ただソチの冬季のパラリンピックでは知的障害の部門がなかったということです。ピョンチャンもふくめ、冬季については、シドニーの事件の影響で、長野のあとは知的障害の種目はないままのようです。

●包摂と排除

司会：流れからいってどんどん包摂はされてきていて、障害をもっている人も参加してもらうという方向になっているのではないでしょうか。

北村：やっぱりオリンピックという本流が先にあって、それにどう合わせるか。世界一をめざすのがオリンピックというのであれば、どうしたって障害者はついていけない。リハビリや器械でできることもあるけど、そういうことでは追いつかない知的障害者もいるわけで。

会場：パラリンピックに「障害」の定義はあるのでしょうか。あるとすればその定義は誰もが納得できるものなのか。

北村：やろうとうする人にとっては当然納得できますよね。ただ、それに疑問があるから絶えず問題になっている。オリンピックといったら資格の問題、パラリンピックといえばなおさら資格が問題になっている。議論は続きます。

会場：障害者と健常者のわくを取っ払えという議論はないのでしょうか。

北村：何らかの形で合流ということも、一部では考えられているでしょうけれど。パラリンピックの記録がオリンピックよりもいい記録だったという例も出ています。

　車いすの子どもが普通学級に行っているところでは、車いすが「かけっこ」で一番だったりするんです。そうすると一生懸命走っている子どもが文句を言う。そういう騒動がいっぱい起こるといいなと思っているんですけどね。山崎君という子が、スタートで介助者がボンっと押すと、あと一生懸命にこいで一番になる。本人は一番だと言うんだけど、誰も一番だとは認めない。そういうところから始まっていかないといけないと思う。はじめに別なところでやっているのではなくて。だけどそういう実績はぜんぜんないです。

●学校と企業とパラリンピック

司会：学校では「障害者理解」みたいな授業があります。「障害者理解」という言葉も上から目線というか、ひどい言い方だなと思いますが、車いす体験とか、アイマスクを使って歩いてみるとか、パラリンピックの時期には車いすバスケットをやってみるとか。選手が学校にやってきて話をすることもよくあって、オリンピック選手が努力して自分の夢がかなったとか、パラリンピックの選手であれば普通の人よりも困難な状況を抱えているのに、がんばって夢を実現したとか。みんなが感動する場が作りやすいので、学校のなかにパラリンピックが取り込まれて、どんどん広げられているような気がします。

北村：パラリンピックのメダリストは売れっ子ですよね。あっちこっちに呼ばれていて、いちばん都合がいいわけです。

司会：お金がものすごくかかりますね。スポンサーとか企業がその人を雇用して選手としてサポートしていく。それは企業の側にしてもプラスになるということだと思いますけども。そういうサポートがついていかないと難しいのかなと……。

北村：企業に応援してもらうまでに相当の困難があるんです。一人一人の選手に聞いてみると、お金を用意して、何人かの専門家を用意して、外国にも行って……みたいなことをみんな自前でやらないと、そこまでたどり着けないようです。

司会：実際に障害をもっている人のなかで、スポーツを楽しむどころか、自由に街に出て過ごしたりすることができている人がどれだけいるのかと考えると、パラリンピックとはものすごいギャップがあるな、と感じます。障害をもった人ともっと普通に友だちになって、いっしょにいろんなところに出かけていけるとか、そういうことの方がまず先かな、という気がします。

●パラリンピック批判はなぜ広がりにくいか

会場：外国の運動のなかで、リオとかピョンチャンとか、現地でオリンピックに対して反対運動はいろいろ起こっていますが、パラリンピックをやめるべきだという運動はないのでしょうか。

会場：リオで反対運動をやっているジゼレ・タナカさんが来たときに聞いたら、パラリンピックは全然考えたことはなかったという発言がありました。日本でいえば、私は介助をやっていて、いろんなところでパラリンピックをどう思うかと聞くと、個人的には反対だという人もけっこういるのですが、でもだからといって反対運動はしたくないという人がすごく多い。それはやはり障害者の分断になるという感じがするのか、せっかく障害者が脚光を浴びるのに水を差すような動きをしたくないということなのか。

司会：私たち「健常者」の側がいいように利用したりしているという問題があるのに、障害者たちが反対するのを期待するというのも、なにかちがう気もします。障害者の側からすれば、「あんたたち（健常者）の問題でしょ」と思うのではないでしょうか。

ただやっぱり、パラリンピックの問題点は東京五輪だけでなく、どのオリンピックにも関わることではあるから、今回私たちが講座で取り上げたような視点を、オリンピック反対運動のなかに発信していく必要はあるのかなと思います。

北村：やっぱり全体的にいえば、差別されていた障害者もいっしょにやれるようになったのはいいことだ、というのが大勢ですよね。差別を受けている状況のなかでは、なかなか考えられないことはあると思います。

たとえばむかしの女性は、いまとは比較にならないほど無権利状態だったわけだけれど、戦争が始まったとき、男がいなくなったので、いろいろな仕事が回ってくる。あのときの女たちは、やっと私たちも国のために役に立つと思った。それと似たような状況が障害者たちに来ている段階だと思うんです。だから障害者にそれほどの立ち上がりを期待するのは無理かなと思いながら、もうちょっと、そそのかさなければいけないかなと、一方では思っています。

●パラリンピックで街を改良？

会場：スポーツとは関係なく、パラリンピックをやることになってよかったと喜んでいる障害者もいるわけですよね。私は脱原発テントの運動もやっているのですが、東京に来たとき障害者は、トイレひとつでもちゃんとしたホテルを探すのに苦労する。パラリンピックが来るとそういうことが改良されていくだろうから、自分はパラリンピックに賛成じゃないけれど、社会全体がそういう問題に目を向けて改良されるのはいいことかな、と言っていた人もいて。障害者自身がおかれている状況がものすごく困難だから、パラリンピックを利用してなんとかしようという意見が出てきて、私もそうかなと思ってしまうのですが。

会場：パラリンピックが障害の程度や種類をかなり厳密に分類しているという話を聞いていて思ったことがあります。神奈川をふくめて、オリンピック、パラリンピックのために街をちゃんとしましょうといわれますが、このごろすごく目につくのは、重度と呼ばれる知的障害の人たちが、これまでは一人で買い物ができていたのに、介助者をつけて来いといわれる。パラリンピックに出られる象徴的な障害者はいいかもしれないけど、逆にそれから切られている人たちは、ひとりでゆったりと行動できる空間が、このごろすごく減っている。あちらこちらで来るなと言われたり、介助者をつけて来いと言われたりということが、かなり目立ってきています。

会場：２０２０年に向けて東京はバリアフリーをちゃんとするというプランがあるらしいけれど、私がいつも思っているのは、そんなのパラリンピックをやろうとやるまいと、たまたまいま予算が出てやっているだけで、それよりもオリンピックにかかる無駄な一兆とか億とかの金をつかって、東京だけでなく、地方でもいろんなところでやるべき、と言った方がいいんじゃないかと思います。

講師・会場一同：そのとおりでーす。

増田：64年東京五輪、長野五輪、札幌五輪、オリンピック、パラリンピックが来て、ほんとうに障害のある人が外に出られるようになりましたか、と。私はすごくそれが言いたいです。

会場：私は身体の障害ではないですけど、当事者なので、ちょっとだけ思っていることを言います。私はパラリンピックが嫌いです。というのも、あれは「第二健常者」のコンテストをしているような感じがするからです。ようするに「あなたはこんなに健常者に近かったから金メダルを上げましょう」といっているだけなので。あと、結局はお金の問題かなと思っています。パラリンピックがあるから障害のある外国人が来て、この街がきれいになる、というのは、そうでもしなければ日本の健常者は街を整備しないだろうというあきらめからきていると思うんです。教育を重点的にやるというのも、街を整備したくないから、比較的お金が少なくてもできる教育でまかなおうというのがみえてきて、すごくいやです。

●子どもたちを動員する

司会：いま学校のなかで行われているオリパラ教育には、本番のときに子どもたちを選手以外の形で五輪に関わっていかせる方向性があります。語学ができる人は通訳とか、外国人のお客さんが来たら案内するとか、いちばん関わりやすいのが障害をもっている人たちへのボランティアとか。子どもたち一人一人が何らかの形で関わっていきましょうというのが都教委の方針ですが、特別支援学校であれば障害をもつ子どもたちがいろんなところに参加したり見学したり、関連するイベントにも動員されていく。そういう子どもの動員の問題について何かありますか。

北村：会を盛り上げるために子どもたちに踊りをさせるとか。そういうのは半ば強制的なのですが、希望者を募るという形でやるんです。そういうことがかなりいい加減な形で行われる。

私は64年のとき学校にいて、オリンピックに反対していたのですが、オリンピック開会式のマスゲームに子どもたちを参加させたいという教員がいて、そのころは職員会議も公正に行われていたときなので、採決をしてうちの学校は結局出ないことにしました。ところが実際の段階になったら人数が足りないので、一回手を挙げた学校は出てくださいという連絡が来た。私はそのとき障害児学級の担任をやっていて、その子どもたちをどうするかという話になったわけです。

北村先生はそもそもオリンピックに反対だから、障害児たちを参加させるのにも反対だよね、と同僚たちは言う。だけど他の子どもがぜんぶ行くならば、私はオリンピックに反対だけど、この子たちは障害児で下手だから置いていくというのは許さない、と言ったんです。下手な子がいて、まぜっかえさなければいけないと思うから、行かせたい。だけどその理屈が普通の教員、仲間である教員たちにはわからない。反対なんだから行きたくないでしょうと言われる。行きたくないけれど、この子が障害児だからダメというのは許さない。だけどその理屈がわからないんです。まあ結局は、まぜっかえしに行ったんですけどね。

増田：オリパラ教育では、２０２０年にすべての子どもが参加す

ると明言されている。「参加する」なんですね。当然、動員です。いま全国の大学の過半数が組織委員会と提携していて、学生を協力させることになっているのですが、最終目的はオリンピックに動員して２０２０年大会を成功させる。そのためにタダで使えるものはどんどんつかう。学生もボランティアなので無料奉仕だし、子どもたちもボランティアマインドとやらを注入される。さきほどの道徳教育の教材の書き込みのように、オリンピック、パラリンピックを成功させるために自分たちの力が必要だ、と自らすすんで動員されていく子どもたちを育てる。

年度初めにオリパラ教育のガイダンスがあったのですが、その担当のＳ先生が、子どもたちにこう呼びかけるんです。「みんなで拍手してみよう。Ｓ先生って大きく呼びかけてくれるか」というと、みんなＳ先生のことが好きだから、「Ｓセンセー」とか叫んでパチパチパチと拍手もして、「みんなどうもありがとうね。いまみんながＳ先生を応援してくれたから、いますごくハッピーだし、力もモリモリわいて、応援されるってことは、とっても気持ちがいいんだよ」と子どもたちをそそのかす。簡単に子どもたちが流されていく。こういうのがあと3年も続くのかと思うと、ちょっと恐ろしいなと思います。

司会：すごくリアルな感じで、私まで怖くなりました。時間になりましたので、そろそろ終わっていきたいと思います。

今日、私たちはパラリンピックの問題について考えましたが、オリパラ教育という形でもっとも強制される場として、学校現場があると思います。学校の問題をふくめて、またパラリンピックそのものについても、今日の講座一回かぎりにするのではなく、引き続き考えていきたいと思います。おことわりンクでは引き続き講座を予定しています。次回４回目は、10月９日に「オリンピックはスポーツをダメにする」ということで、成城大学の山本敦久さんと、名古屋で教員をやっている岡崎勝さんに来ていただきます。

北村：今日、書いていただいたものを、次回まとめてお返ししますね（北村資料Ｄ）。

司会：結果が怖いですが、ぜひ次回も参加して、小夜さんの評価を聞いていただきたいと思います。では今日は北村さん、増田さん、どうもありがとうございました。

❖ 資料

増田資料

［資料A］

「国策教育」＝学校現場に押し付けられる「オリンピック・パラリンピック教育」――「世界ともだちプロジェクト」

増田らな

オリパラ教育において、重点的に育成する5つの資質として「ボランティアマインド」「障害者理解」「スポーツ志向」「日本人としての自覚と誇り」「豊かな国際感覚」が掲げられている。資質育成のための具体的な取り組みとして、都教委は4つのプロジェクトを推進している。

その中に「世界ともだちプロジェクト」というのがある。（他に「夢・未来プロジェクト」（アスリートを招聘して講演等）、「スマイルプロジェクト」（障害者スポーツ体験等）、「東京ユースボランティア」がある。

勤務校では2学期の始まる前、管理職より2020大会参加予定国・地域のうち5か国が都教委の示す「国割表」に基づき学習・交流対象国として割り振られたことが伝達された。「平成28（2016）年世界ともだちプロジェクト実施要項」によると、児童生徒が世界で通用する英語力を身に付けることが真っ先に挙げられている。世界を見渡せば、非英語圏の国や地域が圧倒的なのに、英語以外の言語、特に近隣諸国の言語について、全く触れられていない。英語は、「日本人としての自覚と誇り」の発露？として、日本や東京の「よいところ」を外国人に紹介し、東京の街に不慣れな彼らを「おもてなし」するツールとして位置づけられているところが大きい。

学校では、数か月に1回、ALT（外国語指導助手）と英語活動をする時間がある。2回目の活動では「異文化を知る」というテーマでALTの母国の歌遊びを行った。面白い遊びでかなり盛り上がったが、これがオリパラ学習の一環として位置づけられ、オリパラ学習ノートに感想を書き込むようにとの指示が担当教員から伝達された。

冬休み前のあわただしい時期に、アジアのある国で陸上競技の指導を行い、リオ五輪代表選手を育てた佐藤一郎氏（仮名）の講

演が学校で開催された。国の紹介は国旗と国の位置、「こんにちは」「ありがとう」の現地語、それからその国の代表的な観光地や佐藤氏の現地での指導場面の短い映像が流された。そのあと２０分ほど佐藤氏の講演があった。話の内容は、練習環境や選手の気質、試合の進め方など、その国と日本との違いが中心だった。講演が終了すると校庭に出て、佐藤氏と生徒が一緒に走ったりミニハードルを飛んだりした。近隣小学校の高学年児童も参加し、保護者の参観も相当数あった。校長は「世界ともだちプロジェクト」の対象国のひとつを無事にこなせてほっとした表情だった。

佐藤氏は最後に「陸上競技は、汗をかいた分記録が伸びるスポーツ。君たちもチャレンジしてみよう」「今日ぼくと一緒に走ったみんなの中で、２０２０年オリパラに出場できる人が出るかもしれないね」と子どもたちに語りかけた。アジアの国を知るというより、スポーツ志向を推進する色彩がはるかに濃い「プロジェクト」だった。何人かの生徒に「佐藤さんって、どんな人？」と聞くと、いずれも「走る人」という答えだった。まあ、あれでは対象国が印象に残らないのも、無理はない。

翌日の朝、主任から、昨日のプロジェクトについて、各クラスでオリパラ学習ノートに感想などを書かせるようにとのお達しがあった。

学校には、アジアや南米など、外国にルーツのある生徒が相当数在籍している。彼らのルーツに対して、総じて教員は無関心である。そんな教員の関心を呼び覚ますきっかけとなるのが、もしもオリパラ教育の「世界ともだちプロジェクト」だとしたら、もう世も末だというのが私の実感だ。

☆諸事情により、若干のフェイクを入れてあります。ご了承ください。

［資料Ｂ］

『民主主義のお手本がオリンピックにある』より一部抜粋

（対談：猪谷千春（ＩＯＣ理事―当時）／高嶋伸欣（琉球大教授）「月刊ＭＯＫＵ」２０００年７月号　ＭＯＫＵ出版㈱）

高嶋：（モスクワ五輪ボイコットに関して―ますだ）　選手たちが一生に一度かもしれない晴れの舞台に参加するチャンスを、日本の社会や国際社会がきちんと保障していけるかどうかが、平和なのかどうかを見る一つのリトマス試験紙ではないかという印象をもったのです。

猪谷：選手がいなかったらオリンピックはないし、政治は国民のためにあるのと同じように、オリンピックも選手のためにあるわけですからね。選手中心に物事を考えていこうとしているのです。

高嶋：オリンピックというのは、本当に世界中の人が集まってきて、しかも平等に扱われて、競技の結果で成績が分かれるだけで、スタートラインでは優劣がないんだという公平さで運営されています。子供にとっては、民主主義のお手本になるのではないかという気がしますね。広島でのアジア大会では、ヨルダンの王女が馬術で参加したはずです。王女に広島市内のホテルの貴賓室に入ってもらおうとしたら、本人が「平等に扱ってほしい」と言って、選手村に入ったということで、地元ではずいぶん評判になりました。オリンピックというのは、王子であろうと王女であろうと、選手としては同格なんだということを本人たちも心得ているんですね。

猪谷：選手だけでなく、ＩＯＣ委員でも同じです。委員の中には　アン王女といった王族の方もいらっしゃいますが、席次は常に着任順となっています。ですから、私より後で委員になられた王族・皇族の方々がおられますが、私の方が上席になり、他の一般の委員と全く同格な扱いを受けています。これこそ本当に民主的だなと痛感したのは、ある大会で、アン王女が他の委員とご一緒に、スタンドの前のほうに座って競技を見ておられたときのことです。たまたま世界陸連のネビオロ会長がこれに気づき、使いの者をやって、ロイヤルボックスにご案内しようとしたのです。王女は「ありがとう。でも、私の座っているところがロイヤルボックスだからご心配なく」と毅然とおっしゃって、ご自分はお動きになられませんでした。これなどはスポーツという世界だからこそ見ることのできる光景なのではないでしょうか。

［増田のコメント］

ＩＯＣ委員の猪谷はともかくとして、オリンピックがつつがなく開催されることが「平和なのかどうかを見るリトマス試験紙」と放言する高嶋は、オリンピックの「平和的」開催が、開催国で生活する無数の貧乏人の「平和」を粉々にしている事実を完全にネグレクトしている。排除され、抑圧され、搾取され、差別される貧困者、野宿者、都営アパート住民、スポーツに関心のない子ども達、五輪に反対する市民などの存在を一顧だにしない高嶋の立場性は、オリンピック災害の加害者の側であると言わざるを得ない。

また、高嶋・猪谷両者の対談がいみじくも語るように、オリンピックは身分の貴賤の存在を前提とした上で、「貴」の側にいる者を「他と平等に」扱うことでそれを糊塗し、身分の違いを正当化する装置となっている。モナコの王子、ヨルダンの王女、アン王女らが、いったん競技場を出たら当然のように「貴い」身分の者として特別待遇を受けることについて、それが天皇制にダイレクトに通じる「差別」に他ならないことについては、高嶋も猪谷も見事に口を拭っている。

また、「スタートラインでは優劣がない」「競技の結果で成績が分かれるだけ」というセリフはロスジェネ世代の「負け組」の青年たちに浴びせられる自己責任論の常套句に過ぎない。まさに「内なる優生思想」だ。

この対談には「民主主義のお手本はオリンピックにある」という噴飯もののタイトルがつけられているが、「民主主義」だの「民主的」だのという言葉が身分差別をロンダリングし、排除と抑圧、自己責任論と優生思想を社会全体に押し広げていく道具として動員されているところに至っては、心の底から怒りとおぞましさを覚える。

こうしてみると、猪谷は言うに及ばず、高嶋のオリンピックに対する無邪気な信頼感と、彼の中にある抜きがたい差別意識が一体のものであることが実にはっきりと見えてくる。

【特集】2020年問題――東京オリンピック・原発再稼働・改憲・天皇「退位」

クローズアップされるパラリンピック

――競うものである限り差別は拡大する

北村小夜

わたしが九〇歳を過ぎても元気でいるのはたまたまそうであって特に健康法などを志向したわけではなく、むしろ何もしなかったからである。そもそもスポーツには関心がない、野球のルールさえ知らないし知ろうとも思わない。ましてコンマ以下の数字を競う高さや速さにはまったく興味がない。ただ逃げ足だけは早い方がいいと思っている。何かスポーツに関わるイベントがあって人びとが夢中になって騒ぐときは私にとっては「ひと眠り」の時である。せっかくの眠りの時を「五輪お断わり連絡会」の仲間やこの原稿が邪魔をする。スポーツに関わる文章など書く資格もないし書きたくもない。が、〈憐みの心をもって障害者の努力を讃え、健常者を激励し、肝心な障害者を差別する〉パラリンピックについてなら共に生きることを目指しているものとして一言。

急増するパラリンピック報道

――合同パレードは対等への一歩か

「スポーツを通じてすべての人びとが幸福で豊かな生活を営むことができる社会」の創出を目指す「スポーツ基本法（二〇一一年）」の理念の実現に向けて文科省の外局としてスポーツ庁が創設（二〇一五年）された。二〇一四年からは障害者スポーツに関する事業は厚労省から文科省に移管された。これにともなって、オリンピック競技のみを対象にしていた施策についてパラリンピック競技も一体として推進することになった。

二〇一六年一〇月七日、リオ五輪・パラリンピックメダリストの銀座のパレードの人気はすさまじかった。二〇一二年八月のロンドン大会後の場合は、五輪のみで

五〇万人が集まったそうであるが、今回はパラリンピックのメダリストとの合同パレードで距離も長くなり観衆も大幅に上回った。観衆はパラ・メダリストにより注目し、大きな歓声を上げていた。障害に配慮して車椅子のための観覧席も設けられた。車椅子席が設けられて見ることができたという障害者は、身を乗り出して「パラ・メダリストが自分の頑張りを素直に誇っている姿に感動した」と言い、選手団副団長は「共生社会を作っていく一歩だと思う」と言った。メダリストも「五輪の選手と同じように扱ってもらえてうれしい」と語った。

ほほえましく思える場面もあったがこれを対等への一歩とみていいだろうか、本流があっての合流であって、同じではない。所詮、障害者差別は厳然として存在するなか、障害者が健常な部分を鍛え、機器の力を駆使して勝ち進んだ人たちである。差別は拡大したというべきである。手厚い配慮で差別が進行する。

オリパラ教育でも

東京都教育委員会は二〇一六年一月「東京都オリンピック・パラリンピック教育（以下、オリパラ教育）実施方針を策定、九五〇〇万円をかけて国旗・国家の尊重を強要した「オリンピック・パラリンピック学習読本（小・中・高）を作成配布し、四月から年間三五時間（週一時間）、都の公立学校に五輪教育を義務付けた。どの学校も「学力向上」のための授業時数の確保が大変であるが、オリパラ教育はかまわず降りてくる。四年生以上にはオリパラノートが配られている。二〇二〇年まで書き続けなければならない。各学校三〇万円のオリパラ教育予算も降りている。オリパラ教育で育成すべき目標は、（一）ボランティア・マインド、（二）障害者理解、（三）スポーツ志向、（四）日本人としての自覚と誇り、（五）国際感覚であるからゲストに障害者選手は都合がよい。ある小学校では、視覚障碍者で北京オリンピックの柔道代表だった人が選ばれた。生い立ちからパラリンピック柔道を始めるまでを語り、映像でさまざまな障害者の競技を見せ、実演で柔道を習っている高学年の児童に自分を投げさせ、黒帯の教員を投げて会場を沸かせ、最後に「柔道をやってよかったことは？」という問いに胸を張って「アジア大会で優勝して日の丸が上がり、君が代が流れたこと」と答えた。子どもたちは選ばれた障害者によって五つの目標に沿った学習をし、ノートに書き込んだが、身近にいる肝心なできない障害者に思いを致すことはなかった。障害者理解とはできない障害者こそが対象ではないのか。

戦傷・競うリハビリから始まった

一九六〇年ローマ・パラリンピック大会では八競技であったが、二〇二〇年東京オリンピック大会では二〇一六年のリオと同様、次の二二競技が行われる。

陸上　アーチェーリー　ボッチャ　カヌー　自転車　馬術　サッカー　ゴールボール　柔道　パワーリフティング　ボート　セーリング　射的　水泳　シッティング・バレーボール　卓球　トライアスロン　車いすバスケットボール　車いすフェンシング　車いすラグビー　車いすテニス　バドミントン・テコンドー

ボッチャのように障害者のために考案された競技もあれば、健常者のスポーツと同じ種目でもそれぞれ障害に応じたルールにも工夫がみられるが、大きな特徴は、それぞれの競技が障害の程度によって行われることである。なるべく同じ程度の障害者同士で競えるように障害の種類・部位・程度によるクラス分けをする。そのため例えばパラリンピック陸上競技の一〇〇メートル競走では、障害のクラス分けのため男女合わせて二九ものメダルがある。これではメダルの値打ちが低いと言われるが、公平を保つためである。考えてみれば大変な分断ではないか。年齢や性別による区分と違って障害の軽重による分断で、できない障害者を排除するパラリンピックという別枠スポーツ世界を築き上げてしまったと言えよう。その範疇で選手は競って重い判定を望む。

一九三九年、ナチス・ドイツがポーランドに進撃を開始し第二次世界大戦が始まった。一九四〇年にはパリもドイツ軍に占領され、救援のイギリス軍も敗れダンケルクから英本国に敗走した。連合軍は欧州大陸への反攻を計画するなか、この大規模な作戦には多くの負傷者が出るという前提で対策を立てた。戦傷者を受け入れる病院も専門別に立案し、イギリスでは一九四四年脊髄損傷専門病院をロンドン郊外のストーク・マンデビルに建設した。院長はルードヴィッヒ・グッドマンであった。この脊髄損傷専門病院は、バラックの粗末なものであったが周到な準備をしてノルマンディー上陸を待った。戦闘は連合軍の勝利に終わったが、おびただしい数の兵士が脊髄損傷者となって送り込まれてきた。脊髄に損傷を受けた場合、その回復が容易でないことを知っていたグッドマンは「残存」能力の強化訓練に努力し、その手段としてスポーツを取り入れた。競い合う（勝者と敗者を作る）スポーツの効果は大きく、受傷から六カ月で社会復帰をするという成果を上げ、信じがたい、がその八割が何らかの形で就職したと言われている。成果が讃えられるなか、成果の上がらない「敗者」の消息は分から

ないが、悲惨なものであっただろう。

成果を披露する場として、グッドマンの指導により一九四八年ストーク・マンのビル病院で両下肢マヒ者の競技会が開かれ、それが「ストーク・マンでビル・ゲーム」と呼ばれるようになり、一九五二年には国際的な両下肢マヒ者スポーツ競技会に発展した。さらに一九六〇年にローマでオリンピックが開かれるにおよび、車椅子で生活している重度身障害者の競技大会がパラリンピックの名の下に開催されるに至った（これは、両下肢マヒの「パラプレジア」と「オリンピック」を合成した語である）。

一九六四年の東京大会で国際パラリンピック委員会（IPC）がローマ大会に続き「第二回パラリンピック」と認めているのは、脊髄損傷による車椅子使用者を対象にした第一部だけで、二一カ国・地域から三七五選手が参加し、九競技一四四種目で争われた。以来、一九七六年トロントからは、少しづつ出場資格が広がり、視覚障碍者と四肢切断者らが可能になった。一九八〇年オランダでは脳性マヒ、一九八八年ソウル大会からは他の身体障害者も出場できるようになった。IOCの理解も進み「パラリンピック」が正式名称になり、「もう一つのオリンピック」という考えが定まってきた。

こうしてみると大会ごとに整ってきたように見えるが、障害者の振り分けの基準が整ってきたということである。制度が整うごとに、できないことを弁ぜざるをえない障害者が存在しているはずであるが、あえてそこを無視するのが競争の理である。

戦争をするには国民の逆らわない心と丈夫な体が必要である。もう国民の心も体も国に奪われてしまっている。健康増進法（二〇〇三年施行）は、健康を国民の責務としている。とすれば、責務を果たさない弱者は非国民だろう。私も間もなくその範疇に入る。その範疇から脱したものがメダルを貰い国威の発揚に政治利用される。勝つためには装具も選ばねばならないが、「車椅子の性能ではなく技術の優劣を争いたい」と選手がつぶやく状況がある。メーカーも研究に励み競い合っている。スポンサーの力も大きい。先日、ある小学校三年生の教室でパラリンピックの絵を、といったらコカコーラの壜を描いた子がいた。日本財団パラリンピックサポートセンターも名を連ねている。また皇族の関与が見逃せない。障害者はしばしば憐れみ深い皇族の慈しみの対象であった。すでに国体は天皇、身スポは皇太子という差別的慣例でスポーツとの関係は深い。東京パラリンピックでは全面的にかかわり、期間中いずれかの皇族が観戦し、慰労している。さらなる差別を生み出すパラリンピック、敗者の側から覆そうではないか。

【きたむらさよ：元教師。野垂れ死に願望の老婆です。】

東京オリンピックメモリアルギャラリー（世田谷区駒沢公園 1-1）には 1964 年大会を中心に様々な資料が展示されている。当時の競技プログラムにはピクトグラムがデザインされている。

たが、IOCは、2014年末にオリンピズムの根本原則を改訂し、第6項に“性的指向による差別禁止”を加えました。「単に性的指向の単語を追加するのではなく、第6項全文が世界人権宣言の条文に近い文章になった点で、IOCが人権尊重という課題に力を入れていることがうかがえます」（舛本さん）。

人種差別との闘い

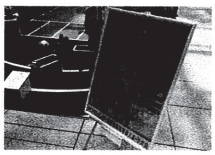
さらに、人種差別問題も、オリンピックに大きな影響を及ぼしてきました。例えば、アパルトヘイト（有色人種の隔離政策）を行っていた南アフリカ共和国は、1964年の東京大会以降、参加が認められず、1971年にはオリンピックから追放されます。復帰したのは、1991年にアパルトヘイトを撤廃した翌年のバルセロナ大会からでした。

また、1968年のメキシコ大会の陸上男子200mで、金メダルと銅メダルを獲得したアメリカ国籍の黒人選手が、表彰台でアメリカ国旗から顔を背け、黒い手袋をはめた拳を高く突き上げました。黒人差別に抗議する“ブラックパワー・サリュート”と呼ばれるこの行為は大きな物議を醸しました。オリンピック憲章では、競技会場などでの政治的パフォーマンスを許可していません。2人の選手は直ちに選手村を追放されました。ところが、実はこのとき、銀メダルを獲得して同じ表彰台に上ったオーストラリアの白人選手も、人権侵害に反対する白いバッジをつけていたのです。「スポーツ界では、白人選手の間でも人種差別に反対する動きがあったのです」（舛本さん）。

障害者のスポーツ参加とパラリンピックの発展

パラリンピックは、戦争で脊髄（せきずい）を損傷した兵士のリハビリとして、イギリスのストークマンデビル病院で行われた車いすアーチェリー大会が基になっています。1960年のローマ大会開催後に、初めてパラリンピックが開催され、車いす選手によるアーチェリーや卓球など8競技が行われました。車いす選手以外の障害者選手がパラリンピックに参加するようになったのは、1964年の東京大会からです。「東京大会は、より多くの障害者にスポーツへの道を開いたといえるでしょう」と舛本さんは語ります。

また、舛本さんは、近年のパラリンピックでは2014年のソチ冬季大会が印象に残っているといいます。「選手村に、国連障害者権利条約に賛同する人がサインすることができるボードが設置されました。東京は2度目のパラリンピックを開催する初めての都市でもあるので、こうした有意義な取り組みを積極的に取り入れた方が良いと思います」。



1964 年東京パラリンピック大会ポスター（東京都人権プラザ「みんなのスポーツ展」より）

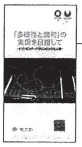
大会を通して人権のレガシーを残すために

オリンピック憲章は大会開催地にレガシー（遺産）を残すことを目標としています。舛本さんは、1964年東京大会のレガシーの一つに「ピクトグラム（図記号）」を挙げます。「競技だけでなく施設や設備にもピクトグラムが体系的につくられたのは、東京大会が初めてでした。多様な国の人たちがピクトグラムで情報を理解する、言語のバリアフリー化に貢献したのです」。

オリンピックはさまざまな人権問題に直面してきましたが、2020年東京大会を通して私たちはどのような人権尊重のレガシーを残すことができるでしょうか。東京大会のエンブレムには「みんなの輝き、つなげていこう。Unity in Diversity（ユニティ イン ダイバーシティ）」という広報メッセージが添えられます。舛本さんは「一人ひとりの多様性を意味するDiversityという言葉は、人権啓発において大変重要」と指摘します。「オリンピック・パラリンピックを通して平和や国際交流、異文化理解などが深まり、多様性を尊重する人権感覚が育つことに期待したいですね」（舛本さん）。

これから私たちも、オリンピック・パラリンピックの話題を人権の観点からも見ることで、より深い理解や感動が得られるのではないでしょうか。

インタビュー／林 勝一（東京都人権啓発センター 専門員）　編集／小松 亜子



「多様性と調和」の実現を目指して

PDF「じんけんのとびら」にPDF掲載
編集・発行：東京都総務局人権部

オリンピック・パラリンピックと人権

企画・製作：(公財)人権教育啓発推進センター

特集

人権とスポーツ2020

人権の視点から見れば、オリンピック・パラリンピックはもっと感動する

2020年の東京大会に向け、本誌はオリンピック・パラリンピックを人権の視点から見つめる連載を始めます。第1回となる今回は、オリンピックの根幹にある人権尊重の理念について、首都大学東京特任教授の舛本直文（ますもとなおふみ）さんにお話をうかがいました。

オリンピック憲章が謳（うた）う人権の尊重

オリンピック・パラリンピックは、4年に1度のスポーツの祭典として、多くの人が選手のメダル争いに注目します。しかし、オリンピックはもともと、スポーツを通した教育や平和のために誕生した祭典で、人権と深い関わりがあるのです。

「近代オリンピックの父」と呼ばれるフランスの教育家、ピエール・ド・クーベルタン男爵は、スポーツは体を鍛えるだけでなく、心身の調和のとれた人間を育成し、フェアプレーの精神や友情、道徳、連帯感を育むことができると考えました。さらに、国際的な競技会で他国の選手と親しくなり、多様な文化や芸術に触れることで、平和な社会の実現につながると考えたクーベルタンはオリンピックのあるべき姿として、「オリンピズム（オリンピック精神）」を提唱しました。そして、1894年に国際オリンピック委員会（IOC）が設立され、古代ギリシャで行われていたオリンピックは復興されました。

オリンピズムの根本原則（抜粋）

2. オリンピズムの目的は、人間の尊厳の保持に重きを置く平和な社会を奨励することを目指し、スポーツを人類の調和の取れた発展に役立てることにある。
4. スポーツをすることは人権の１つである。すべての個人はいかなる種類の差別も受けることなく、オリンピック精神に基づき、スポーツをする機会を与えられなければならない。オリンピック精神においては友情、連帯、フェアプレーの精神とともに相互理解が求められる。
6. このオリンピック憲章の定める権利および自由は人種、肌の色、性別、性的指向、言語、宗教、政治的またはその他の意見、国あるいは社会のルーツ、財産、出自やその他の身分などの理由による、いかなる種類の差別も受けることなく、確実に享受されなければならない。

（日本オリンピック委員会「オリンピック憲章」2015年版・英和対訳より）

舛本直文さん

十九世紀末、ヨーロッパ列強による植民地争奪と勢力圏拡大が激しさを増していた時代に復興されたオリンピックは、こうしたクーベルタンの教育と平和の思想に基づいているのです。そして、1908年にはIOCにより「オリンピック憲章」が制定され、その後に定められた根本原則には、「人権の尊重」が謳われています。

オリンピック研究やスポーツ哲学が専門の首都大学東京特任教授、舛本直文さんは次のようにいいます。「人が平和に生きるには、人権が満たされていなければなりません。平和をめざすオリンピックの根幹に人権が位置づけられているのは理にかなったことです」。

しかし、このような志を掲げながらも、オリンピックはさまざまな人権問題を抱えてきました。

オリンピックが直面してきた様々な人権問題

オリンピックの人権問題として、第一に、「女性の参加」と「性的少数者」の問題が挙げられます。

舛本さんは「1896年の第1回アテネ大会では、女性は参加できませんでした」といいます。当時の大会は、絶対神ゼウスを崇めるために行われていた祭典競技「古代オリンピック」をモデルにしており、これが女人禁制だったためです。「まだ女性の権利が十分に保障されていない時代だったこともあり、クーベルタン自身も女性の参加には反対していました」（舛本さん）。

1900年の第2回パリ大会からは、女性も参加するようになり、時代とともにその競技数も増えていきます。ところが、1964年の東京大会で、“男性のような”体格をした女子選手が陸上競技でメダルを獲得したことで、性別を疑う議論が起こりました。「その結果、1968年のメキシコ大会から、女性だけ性別検査が始まりました。これが女性の人権侵害にあたると多くの抗議がされますが、1999年に中止されるまで30年以上、女性のみの検査が続きました」（舛本さん）。

また、2014年のソチ冬季大会では、開催国のロシアにおける性的少数者に対する差別が問題となりまし

1

ほこりある生き方

スポーツの力

佐藤真海さんの姿から、「ほこりある生き方」について考えましょう。

病気のために右足が義足になった佐藤さんは、暗いやみにつき落とされたような思いでしたが……。

東京へのオリンピック・パラリンピック招致で話をする佐藤さん

あなたは、「スポーツの力」ってどんなものだと思いますか。

この写真に写っているのは、三大会連続でパラリンピックに出場した走りはばとびの選手、佐藤真海さんです。ほかの競技でもかつやくをしている佐藤さんですが、じつは、十九才のときに右足のひざから下を失ってしまったのです。

佐藤さんは、宮城県気仙沼市に生まれました。小学生のころからスポーツが大好きで、水泳や陸上競技にはげんでいました。東京の大学に進学してからは、おうえん部のチアリーダーとして、いつもえがおでかつやくしていました。

ところが、大学二年生のとき、右足首が骨肉腫という病気におかされました。このままでは、がんが体のほかの部分に広がって、命に危険をおよぼす可能性があります。

佐藤さんは、家族や友人、病院の人たちにはげまされ、右足のひざから下を切断する手術を受けました。

十か月間の入院後、佐藤さんは退院して大学にもどることができました。しかし、義足をつけての生活は、これまでとは大きく変わってしまいました。走るどころか、歩くことすら思うようにできないのです。これまでの自分と同じような生活を送っている大学の友人たちを、うらめしく思ったこともありました。

「どうして、私ばかりがこんな目にあうの……。」

暗いやみの中につき落とされたような日々が続きました。

そんなあるとき、「東京都障害者総合スポーツセンター」を見学する機会がありました。プールで気持ちよさそうに泳いでいる人たちを見ているうちに、

（私も泳ぐことができるかもしれない。）

という気持ちになってきました。

義足を外してプールに入り、クロールをしてみました。すると、なんとか泳ぐことができたのです。それからは、ただ泳げることがうれしくて、毎日のように泳ぎました。

「水泳なんて無理だと思っていたけれど、そんなことはなかった。もっと、ほかにもできることがあるかもしれない。」

新たな希望がわいてきたのです。

佐藤さんは義足をつけて、陸上競技にもちょうせんしはじめました。目標をもって練習に打ちこみ、それをこえていくうちに、自信を取りもどしていきました。

100メートル走の練習

骨肉腫
骨をおかす悪性しゅよう（がん）。

国際的な大会で走りはばとびをする佐藤さん

「まだまだできる。あきらめることなんてない。」

右足を失ったことは、何よりもたえがたい、つらい経験でした。しかし、たいせつなのは失ったものではなく、今の自分、そしてこれからの自分だと、佐藤さんは気づいたのです。そう思えたのは、前も今も変わらずに自分のすぐそばにある存在、スポーツのおかげでした。

佐藤さんはついに、二〇〇四（平成十六）年、アテネパラリンピックに出場することができました。そこで世界のトップ選手たちを見て、とてもおどろきました。

どの選手も、「障害がありながらスポーツにいどむ喜びに満ちあふれ、キラキラとかがやいていたからです。

「スポーツがこの人たちを、こんなにもかがやかせているんだ。私もこんなふうに生きたい。」

佐藤さんは、それからも多くの大会に出場しました。

二〇一一（平成二十三）年三月十一日、佐藤さんの故郷を大きな津波がおそいました。東日本大震災が発生したのです。

佐藤さんは、たくさんのおうえんメッセージを集めて故郷に持ち帰り、被災地の人々をはげましました。このとき、日本だけでなく世界中から、たくさんのスポーツ選手たちが千回にもわたって被災地に足を運びました。そして、スポーツをとおして五万人以上の子どもたちを元気づけました。

スポーツが、被災した子どもたちのえがおを取りもどしているようすを見て、佐藤さんはスポーツがもつ力の大きさをあらためて感じました。

「つらいできごとがあって、たいへんな目にあったとき、前向きに生きていくためには、新たな夢や目標をあたえてくれるものが必要だ。私にとって、それはスポーツだった。もっと多くの人に、このすばらしさを広めていきたい。」

それからも佐藤さんは、障害者スポーツへの理解としえんを広げる活動に取り組んでいます。

作・長崎千佳

中学生と交流する佐藤さん（茨城県盛岡市）

考えてみよう

「もっと多くの人に、このすばらしさを広めていきたい。」という夢をもつ佐藤さんの気持ちを考えよう。

見つめよう生かそう

尊敬する人のすごいところはどこかな。「ほこりある生き方」について考えたことをまとめてみよう。

9

その国のほこりと伝統

東京オリンピック　国旗にこめられた思い

一九六四年の東京オリンピックで使う国旗作りを任された吹浦さん。アイルランドから色がちがうと言われ、何度も何度も作り直します。

吹浦さん

日本の文化や伝統で、外国に伝えたいものはありますか。

二〇二〇（平成三十二）年夏、東京でオリンピック・パラリンピックが開かれます。

じつは、一九六四（昭和三十九）年にも東京でオリンピックが行われています。このとき、参加した九十四か国の国旗が、競技場、開会式、表彰式、空港などで使われました。

国旗はその国を表す、まさに顔のようなものです。もし、これにまちがいがあったら、国際問題になることもあります。

そんな重大な国旗作りを任されたのが、まだ大学生だった二十一才の吹浦忠正さんでした。国旗にくわしい人物として、立場に関係なく選ばれたのです。

吹浦さんは、小学生のころから国旗に興味をもっていました。

（この色や形は、いったい何を表しているのだろう。どうして似た国旗があるのだろう。）

地図帳にのっている国旗を見ては不思議に思っていました。そのうち、自分で調べようになり、十代のうちに国旗についての本を出版するほどの知識をもっていたのです。

いざ国旗作りに取りかかってみると、吹浦さんの前にはいくつものかべが立ちはだかりました。当時の日本には、国旗についてのくわしい資料はほとんどなく、専門家もいません。

＊オリンピック・パラリンピック　第三十二回オリンピック競技大会（二〇二〇／東京）、東京二〇二〇パラリンピック競技大会のこと。

外国の資料をもとに見本を作って送り、各国のオリンピック委員会に認めてもらうほかはありません。このころは、まだ電子メールもなく、国際電話も通じにくかったので、やりとりはすべて郵便で行われました。すぐに認めてくれた国もあれば、ここをこう直してほしいと伝えてくる国もありました。そういう場合は、見本を作り直して送ります。このやりとりを約百の参加予定国と行うのです。とても時間のかかる作業でした。

そんななか、アイルランドとやりとりしたときのことです。アイルランドの国旗は、緑、白、オレンジの三色が縦形に並ぶもので、とくに難しいものではありません。ところが、何か月もかかってようやく来た返事には、

「緑色がちがいます。私たちの国旗の緑は、この色ではありません」

と書かれていました。

（この緑色がちがう？　いったいどんな緑色ならよいのだろう？）

吹浦さんは、何度も見本を作り直しましたが、なかなか認めてもらえません。用意していた緑色の布のどれにも当てはまらないとなると、送られてきた紙の色見本を参考にしながら、アイルランドの国旗のためだけに、新たに手作業で布を染めるしかありませんでした。

アイルランドの国旗

各国の国旗を準備しているところ
（いちばん右が吹浦さん　1964年5月）

（オリンピックまで、もう時間がない。このやりとりは、いったいいつまでかかるのだろう？）

あせりと不安がつのるなか送った七作目の見本も、認められませんでした。ただ、そこには、次のような言葉がそえられていました。

「この緑は、私たちの国のほこりを表す色なのです。」

（かれらが求めている緑色がわからない。でも、なんとしても認めてもらわなければ）

なやんだ末に、吹浦さんはアイルランドの歴史や風土を、もう一度学び直しました。

（そうか、この緑は、昔から自然の豊かなこの地に暮らす人たちの、伝統やほこりを表す色なのだ。）

アイルランドが森と湖の国であり、エメラルドの島と呼ばれていることをあらためて学んだ吹浦さんは、やや青みがかった緑色に染めた布で、八作目の見本を作りました。

そして、いのるような気持ちで送った八作目の見本。ついに、返事が届きました。

「この緑こそ、私たちの国の色です。」

ようやく、認めてもらうことができたのです。オリンピックが開かれる、わずか十日前のことでした。

十月十日、開会式の日、会場には九十四か国の真新しい国旗が、一つのまちがいもなくかかげられていました。その中を、各国の選手たちが国旗を持って、どうどうと入場してくるのです。吹浦さんの胸に、熱い思いがこみ上げてきました。

（国旗を知ること、それが、国際理解の第一歩になるのだ。）

吹浦さんは、そう確信しました。

一九六四年の東京オリンピックでつちかわれた国旗作りの技術と経験、そして思いは、二〇二〇年の東京オリンピック・パラリンピックにも、受けつがれていくことでしょう。

作・高橋小夜　絵・神原一樹

オリンピック開会式のようす（1964年10月10日）

考えてみよう

二〇二〇年の東京オリンピック・パラリンピックに受けつがれる「思い」とは、どんな思いだろう。

見つめよう　生かそう

誰とでも他国の人と交流したり親しくしたりするには、どんな心をもつことがたいせつだろう。

オリンピック災害おことわり！　連続講座第３回（２０１７・７・１５）
～　パラリンピックは障害者差別を助長する～
に参加された皆さんありがとうございました

北村小夜

戦争をするには国民の逆らわない心と丈夫な体が必要です。

憲法が権利と位置付けている「健康」を２００２年公布の健康増進法は責務と逆転させました。学校はその実施主体として「早寝、早起き、朝ごはん」運動を始め健康診断、体力測定などを強化しています。中学校の武道では銃剣術さえ選択可能です。すでに体は国の管理下に入っています。学校を覗くと子どもたちが姿勢や行動を厳しく指導されていて危機を感じます。

２０１８年度からは道徳が教科化されます。すでに教科書の採択は終わりました。採択に当たっては育鵬社まがいの教育出版社を採択させない取組みがありましたが、問題は教育出版社だけではありません。教科書は商品です。商品になるためには文科省の検定を通らなければなりません。商品は売れなければなりません。そのためには教育委員会に採択されなければなりません。出版社は２００４年Ｎ社の倒産を忘れません。かって多くの中学校で使用されていたＮ社の中学校歴史教科書は「新しい教科書をつくる会」などが跋扈するなかでも従軍慰安婦や侵略の事実もきちんと書きました。結果、検定は通ったものの「自虐史観」攻撃のなか、混乱を恐れた教育委員会が全く採択せず倒産に陥りました。こうして教科書は政権の思うままになっています。今回の道徳教科書は初めての事なのでなおさらでしょうが、８社とも自社の特性を出すこともなく、必要以上に学習指導要領・解説の意を忖度して、似たり寄ったりの愛国心満載です。巷の話題にもなった「パン屋が和菓子屋に」「アスレチック用具が和楽器に」変わったのも教科書会社の自主規制、忖度の産物です。

７．１５資料として取り上げたのはその１つ日本文教出版社の６年生用です。第Ｉ課に「スポーツの力」としてパラリンピックアスリートを、第９課では「東京オリンピック　国旗に込められた思い」として国旗作りの苦心談を載せています。

道徳は聞くだけでなく議論し考えることとしていて、それを記入することが求められています。当日、参加者に小学６年生になったつもりで教科書を読んで上で設問に従って記入してもらいました。次ページ以下にそのすべてを印刷しました。できればこれをもとにもう少し深く道徳とオリンピックについて話し合いたいと思っています。

スポーツの力

２０１７・７・１５　「パラリンピックは障害者差別を助長する」集会に参加された皆さんに２０１８から使用される小学６年生用道徳教科書（日本文教出版社）第１課「スポーツの力」を学習して(読んで)もらって、別冊ノートに設問に従って書いてもらったものです。
～６年生になったつもりで、そして読んだ教師が評価の参考にするだろうことを強調したのですが・・・

「スポーツの力」の要旨
　病気の為右足が義足になって暗闇に突き落とされたような思いになった佐藤さんは、障害者スポーツセンターの仲間をみて自信を取り戻し、パラリンピックにも出場し、被災地の人々を励まし、障害者スポーツへの理解と支援を広げる活動をしている。

設ふ①
「もっと多くの人に、このすばらしさを広めていきたい。」という夢をもつ佐藤さんの気持ちを考えましょう。

・　これをすばらしいと思わない人はどうすればいいのでしょうか
・　一人でも多くの人が自分のように新たな希望を見つけてほしい
・　すばらしいと思います
・　佐藤さんの努力はすばらしいのでみんなもそれを理解したらよいのではないかと思う。自分も困難になったらこんな努力ができるか疑問である。
・　被災地のニーズは仮設住宅から出て暮らせることだと思います。
・　私は佐藤さんではないのでいっしょうけんめい考えたのですがわかりません。「もっと多くの人に、このすばらしさを広めていきたい」というのが佐藤さんの気持ちなんだと思いました。
・　佐藤さんは自分がスポーツによって励まされた経験を他の人にもつたえていきたいと思ったのだろう。病気や災害などに苦しんだことから立ち上がる勇気はだれでももつことができるというメッセージですばらしいと思う。
・　水泳をして泳げて義足をつけて陸上競技にちょうせんして自信を取りもどした。「まだできる。あきらめない」ことに気づいた佐藤さんが故郷の人たちを励まし、元気づけた。つらいできごとでたいへんな目にあったとき前向きに生きていくためには夢や目標をあたえてくれるものが必要だ。
・　暗いやみの中にあった　気持　を再び希望を持ち、まだやれるという前向きな気持ちになれたこと。
・　スポーツにうちこんだりパラリンピックに出ようとがんばったり他の人に教えていたりしている間は病気や震災のつらさを忘れていられるのだという前向きな気持ち
・　自身にふりかかった苦難にめげず、与えられた環境の中でできることや未来の自分を想像して努力することの大切さを実感したのだと思います。
・　前向きにがんばること、目標をもつこと。
・　すごいと思いました。私もすばらしい夢をもちたいと思いました。

・　佐藤さんは病気になる前とても活躍していたのに、右足を失うという大変な経験をしてしまいました。辛い中で、障害者でもスポーツができるということに気づき、いまの自分にできることをしようと考え新たな目標を得たのです。佐藤さんはスポーツの持つ力のすばらしさを広げるために活動しています。
・　佐藤さんはスポーツで、自分が失った力をとりもどしたのですが、他の方法や分野で自分の力をとりもどすこともあると思います。また、自分を助けてくれた人からいろいろな力を得ることもあるので、スポーツだけを広めていきたいと思うのは佐藤さんの考えで、そうは思わない人もあると思います。
・　人のやっていることを見て自分でもできるんではないかとおもったこと。
・　体が不自由でも頑張れば活躍できる場面があるとわかった。自分　も極めて困難な状況に追いこまれても佐藤さんのように夢を失わず前向きに生きていこうと思った。
・　自分が一度あきらめたことを取り戻すことができた時の喜び、パラリンピックで自分と同じような人たちがいることを知ったこと。これが佐藤さんの気持ちを前向きにした。
・　不幸になってもスポーツでキラキラかがやけるからみんなにスポーツをやりなさいという信仰心に似た気もち。
・　スポーツによって、希望を見出した佐藤さんは、まわりの人にもその喜びを伝えていきたい。
・　片足を失ったことはつらいことだけどスポーツが自分の生き方を変えさせてくれた。それだけでなく他のめぐまれない人たちにも勇気や元気を与えることができる。スポーツにはそういう力があることがわかった。
・　もっと、しょうがいのひどい人ならどうしたらいいのでしょう。スポーツをたのしむことは大切です。でも「強いか弱い」「早いかおそい」はどうでもいいことです。（ちょっとひねくれた子どもと仮定して）
・　佐藤さんは他の人にも自分と同じような貴重な体験をしてほしいとおもっているのかな？　でも「私は特にめぐまれているのだから、だれにでもできることだとは思えない」と思っている気もする。
・　本人がそう思いこむのは当然で自由。私自身には関係ありません。
・　佐藤さんは、自分のつらさを乗り越え、多くに人に自分の成果を伝えようというのだから素晴らしいと思います。とおもうのかなあ・・・。
・　私のようにつらい出来事があったときでも、前向きに新しい夢や目標を持ってもらいたいという考えになったから
・　スポーツとりわけ学校スポーツはとても不快なものです。競技スポーツを至上とするパラリンピックは、それを国家大に拡張するので、素晴らしさを感じません。佐藤さんが自身として楽しんでいることを無理にこちょうすべきではありません。
・　スポーツができる人とできない人がいるので、すべての人がスポーツをすばらしいと思うわけではりません。だから佐藤さんの気持ちは色々な人々の気持ちのごく一部のものでしかないことを知ることが大切だと思いました。

2

・　子どものころからスポーツが好きだったので、丁度よかったのかもしれません。３・１１で被災したのが東京でなくてよかったと言った大臣や、放射能はアンダーコントロールとウソをついた首相の発言とはぜんぜん違うとおもいました。
・　前向きにいきていくための新たな夢や目標を持つことは大切だと思うが、それをスポーツに求めていくかは個人の自由だと思う。選択肢の一つとして伝えるのは問題ないが、もっといろいろな選択肢があることも伝えてほしいと思った。佐藤さんの気持ち自体は悪いことではなく本人が前向きで楽しく暮らせているならそれでよいとは思う。
・　右足が義足になっておちこんでいたがスポーツと出会い、新たな希望を見つけた。また挑戦し、ついにパラリンピックに出場することができた。キラキラとかがやいている世界のトップ選手たちを見て自分もこんな風に行きたいと思いスポーツの力を感じた。
・　困難なことがあってもすぐにあきらめず、何ができるかを考える。あきらめない気持ちをもつ。そうすればキラキラ輝く生き方ができる。
・　佐藤さんが障害を負って、いったんは自分はダメだと思ったが障害スポーツと出会って希望をもつことができたことがわかりました。僕は運動神経がにぶいのでスポーツで希望を持つことは無理なので社会とか理科とか算数をがんばります。僕はスポーツはできません。佐藤さん頑張ってください
・色々な人がいると思う。佐藤さんに様な人を見て多くの人を見て行くことは大変なことだと思う。

設問②
尊敬する人のすごいところはどこでしょう。「ほこりある生き方」について考えたことをまとめてみましょう。

・　みんながいいといってもそうはいかないといえるひと
・　一歩を踏み出す勇気
・　生きる　　希望を見つけるところ
・　自分以上に努力するのが良い事であると思う
・　国や行政の決めた巨大プロジェクトにうたがいを持つこと
・　生まれながらに「すごい」人はいません。いろいろな困難にあったときそこから負けずに生きる生き方が「ほこりある生き方」だと思う。
・　前向きに生きていくためには新たな夢や目標を以て生きていく
・　何があっても困難なことが起きてもあきらめないこと。目標を以て自分を信じていくこと。
・　私が尊敬するのはつらいことや自分の気持ちにむきあったりそれを大切にして他人に接することができる人の生き方です。
・　スポーツに限らず、何かを通じて自信を取り戻すことが「尊敬する人のすごいところ」だと思います。

3

・　自分で考えてみんなと一緒に仲良くすることを実行すること
・　尊敬する人がいないのでわかりません。ほこりある生き方を考えましたがわかりません。
・　自分に自信を持ち、今日よりも明日と成長していこうと目標を持ち、それをこえていく強さがあるところ。
・　誰も自分らしく生きることだと思います。スポーツ以外の例も教えてください。
・　いつも、次の目標を考えて、実現しようとすること
・　夢をあきらめず人より以上に練習に励んだこと。
・　失ったものにこだわりつづけるのではなく、今の自分を受け入れ、前に向かってすすむこと。
・　チャレンジ精神。失ったものにこだわるのでなく、あきらめない心。
・　信念をもって生きていくこと。
・　つらいことにも屈せず　そのことを通して他の人にも元気を与えることができるような人
・　障害があったり辛いことがあってもあきらめず色々なことにチャレンジするところ。～いつのまにか教材を見て「尊敬する人」＝パラリンピアンとすりこまれている。私はそういうことができないのでダメだな、もっとがんばらないとなと思いました。～がんばっていない自分はダメと言う自己否定の結論
・　「尊敬するなあ」と思う人でも「いやだなあ」という面もあるし、結局自分が大切に思うことを大切にしている人、自分がほんとうはそうしたいと思うことをできているひとかな。
・　何に「ほこり」を感じるかは個人個人別々。尊敬する人はいません。
・　やればできると信じて本当に実行できる。それはほこらしいと思います。とか考えるかなあ・・・
・　誇りある生き方はあきらめないで常に前向きな人であること
・　ほこりある生き方はこのテキストに書かれていませんが自らかんがえていきたいとおもいます。
・　革命をやったこと
・　他人の意見も聞きながらより全体がよくなるように気を配っている所。たとえ自分が悪者になろうとも正しいと思ったことは曲げずに貫く姿勢は尊敬します。
・　私も佐藤さんのように自分のことをネガティブに受け止めるのでなくて前向きに生きたい
・　がまんづよいところ。いじわるされても相手と決して同じレベルにならない。自分にほこりをもつとはこういうことだと思う。
・　自分が好きなことや得意なことを見つけて一生懸命になれる人はすごいと思います。僕も歴史の勉強が好きなのでがんばります。僕が尊敬するのは明智光秀です。信長はすぐ人を殺す人で光秀はやさしくてとてもいい人なのに謀反人みたいに言われてかわいそうだといつも思います。
・　目標に向かってがんばると単純に考えるだけではいけないと思った。

東京オリンピック　国旗にこめられた思い

２０１７・７・１５「パラリンピックお断り」集会に参加された皆さんに、２０１８年度から使用される小学６年生用道徳教科書（日本文教出版社版）第９課「東京オリンピック　国旗に込められて思い」を学習して(読んで)もらって、別冊ノートに設問に従って書いてもらったものです。
～６年生になったつもりで、と教師が評価の参考にするだろうことを強調したのですが・・・

第９課「東京オリンピック　国旗にこめられた思い」の要旨
　１９４６東京オリンピックに際して各国の国旗づくりを任された吹浦忠正さんが、アイルランド国旗の色がなかなか納得されなかったことを通して「国旗を知ることが国際理解の第一歩」と確信する。

設問①
　２０２０年の東京オリンピック・パラリンピックに受けつがれる「思い」とは、どんな思いでしょう。
・　国旗・国歌の中にその国の人々の伝統やほこりがこめられている。それぞれの国の人々の大切にしたい。
・　国旗が国家を象徴するのだとしたら「日の丸」が日本をどう象徴しているのかを考えていくことが「思い」を考えていくことだと思います。
・　この質問は難しくてわかりません。国旗を苦労して作った思いが受け継がれても意味がないのでもっと他の事があるのでしょうが、よくわかりません。
・　オリンピックに国旗は不要だと考えているので思いが受け継がれるとは信じられません。国際理解と国旗を切りはなして把握するべきではないでしょうか。
・　１９６４のオリンピックの人のように自分や他の国の人のことをよく考えられる人の思いをもつということ
・　国旗を知ることが国際理解の第一歩
・　国旗にこめられた思い
・　国旗は国にあらわしているので国を知る勉強が必要である
・　今からでも中止にしてほしいです
・　自分の国のことだけでなく他の国の歴史や国土を理解する、そしてそれを尊重するようにする。そういう思いこそが受けつがれる。
・　国旗を知ることです。
・　オリンピック・パラリンピックには数多くの国々が参加します。それらの国々には各々の歴史や文化があり、そのような他国との違いを理解することが国際理解となる。それが受けつがれる「思い」です。
・　６４か国のほこり　国旗図づくりの技術と経験　選手に正しい国のほこりをあらわした旗を持って入場してほしいという思い

5

・　外国のことを知ることで技術や経験がうけつがれて国が豊かになる
・　国旗はその国の歴史や風土を背景に持つ大切なものであることを認識し、他の国の人と仲良くしょうとする思い。
・　旗にこめられた意味を、その国の歴史や人々の生活について知りながら考える事
・　ふだんはきにとめないで国旗の色やデザインにもそれぞれの国民にとって大きな意味があることがわかった。国の成り立ちをもっと知りたくなった。
・　自分に与えられた仕事を真剣にこなし、技術と経験を伝えていきたいという思い。
・　この話から２０２０年に受けつぐものがあるとは思えない
・　あきらめない思い
・　国旗を知ることが国際理解の第一歩になるので各団体の国旗を大切に扱おうということ。でも国際理解とスポーツの関係がいまいちわかりません
・　「吹浦さんが、アイルランドの歴史や風土、その国の人のきもちを大切に考えながら国旗を作ったように参加する国のことを尊重すること」辛い・・ムリ・・
・　国旗はその国の顔だということが分かりました。朝、当番で国旗をあげるのはとても大切な係なので一生けん命頑張りたいです。色々な国の国旗を知りたいです。
・　オリンピックは複雑だと思った。抽象画をわかりやすく説明しなさいと言われたような気がした。僕は芸術家でありたいと思うのだがあまりに単純な日の丸の図をみて育ってしまった。
・　色々な国の国旗にこめられたいみを知るという思い
・　その国の歴史や文化を知り理解すること
・　国旗を知ることそれが国際理解の第一歩　国旗はそのくにを表す顔のようなものだから間違いがあってはならない。国際問題にならないとも限らない
・　国旗にまちがいがあると国際問題になりかねない。オリンピックで失敗はゆるされない。
・　国旗は歴史の中でかわるものです。あまり深く考えることはないでしょう。
・　参加する国の国旗は顔であること。顔はその国を表している。まちがいなく伝えていくこと。結局よくわかりません。
・　今はコンピューターとかインターネットとかがあるので楽だと思う。
・　アイルランド国旗はイギリスと闘ったジェームスコノリーらのダブリンストライキやイースター蜂起の武装蜂起によってかちとったプライドがあることが分からなかった吹浦さんの失敗を受けつがないようにしたいという思いです。

設問②

進んで他国の人と交流したり親しくしたりするには、どんな心をもつことがたいせつでしょう。

- 自分の考えとは違う考えの人々が世界には沢山いるということをもつこと
- 「くに」を超えて人々が結びついていくとはどうしたら可能になるのか考えていく心をもつことが大切だと思いました。
- 相手の人を尊重する心、これは大人になっても同じだと思います。
- すくなくとも他者の重いを大切にすること。レイシズムは排斥することでしょう。
- 自分たちの国と他の国とを理解しようとする心をもつこと。
- 好奇心
- 他国の事を知る心。
- 相手の気持ちを十分に理解することが必要である。
- 同じ日本の人でもちがった考えを持つ人がたくさんいる事を知った上でコクセキで相手を見ないこと。
- それぞれの国の歴史を学び理解する。自分の国の考え方だけにとらわれない心がたいせつです。
- 他国の人と交流したいという心をもつこと。
- 生まれて育った環境が違えば考え方が異なることもある。しかし一つの地球に住んでいる同じ人間であることで我慢していくことです。
- きちんと相手の人に何度もかくにんして相手の大事なものを大切にする。
- やさしい心
- 相手を尊重し、その国の歴史や風土を学ぶ謙虚さを持つ心。その人が大事にしていることを尊ぶ心。
- まずは何も考えないで話すこと
- 相手の立場に立って思いやる気持ちが大切だと思った
- 相手の国の文化と背景を理解し、尊重していくこと。
- 自分がこの色とおもっても別の人はちがうとおもうことがある。
- おもいやりの心
- 競争なんかしないで楽しく試合をやりたいという心
- 外国の人と友達になるために、外国の人に思いやりを持って親切にするのが大切だと思います。外国の人が困っていたらやさしくしてあげるのが大切だと思います。あと英語の勉強をがんばりたいです。
- 相手の気持ちを考える。
- 相手の立場を考え思いやりを持つ心。
- 相手のことを知ろうとすること
- きちんとやりとりして、尊重すること。
- 親しい友だちにもつのとおなじ心をもつこと。
- 伝統やほこりを思い描き、尊重する心を持つこと。
- 自分よがりに考えるのではなくて相手の立場に考える、けど、相手はひとつではないのでむずかしいと思う
- 「他民族を抑圧する民族は自由ではありえない」という心をもつことです

アンケート用紙に自由に書いていただいたもの

- オリンピック・パラリンピックには大反対。東京は返上して欲しい！
- 子どもの頃、というより、つい最近まで、私は「この質問で相手はどういう答えを求めているんだろう」と言うことを考え、パーフェクトな答え、自分にとってではなく、質問を投げかけている側にとっての答えを探すことを当たり前にやってきていた。今はそういう回路をたち切りたいと思っている。し、相手にそうさせるような訊き方はなるべくしたくない、と思う。こういうコミュニケーションそのものに拒否感をかんじる。成績優秀だった自分が大嫌いだ。思い出したくもない。だから　書けない。
- 子どもになったつもりで教材を書きましたが、私はまじめで洗脳されやすい子どもだったのできっとこんなことを書くだろうな・・・ということを想像すると、今の自分としては抵抗があり途中で手が止まってしまいました。こんなものを子どもたちがなんの疑いもなく取り組まされると思うと恐ろしいです。
- あるべき人間を教育を通じて作られていくことが今日の課題で実感しました。　思い出せば　道徳の授業は先生の話をきくだけの時間だったので楽しかったというからくだったと思い出しました。
政治に批判をもたない様にすること　表向きはいいいい人、実は差別を考えることもしないようにさせられることに教育の重要性がある　当たり前・ふつうの人がいいということが教えられてきたと思います。
- パラリンピック（オリンピックではなく）をやたらもちあげている人々、為末大や渋谷区長、長谷部健氏などの気持ちわるさが何なのかちょっとわかったような気がしました。「障害者へのあわれみ、うしろめたさ」を「応援」することで自らアピールしているように思います。“差別の克服”“人権”“格差の具体的な是正”でなく「応援」、そしてそれがビジネスになる・・・
パラリンピックが技術の競争（資金力の競争？）であることもうすうす感じていましたが・・・障害の程度でクラス分けするところから競争が始まっている。公平さを追求すると格差に注目せざるを得ないのがやはり競争を良しとするオリンピック・パラリンピック自体の問題なのだと思います。パラの歴史など知らなかったことも多くとても勉強になりました.有難うございました。
道徳教育こわい！

8